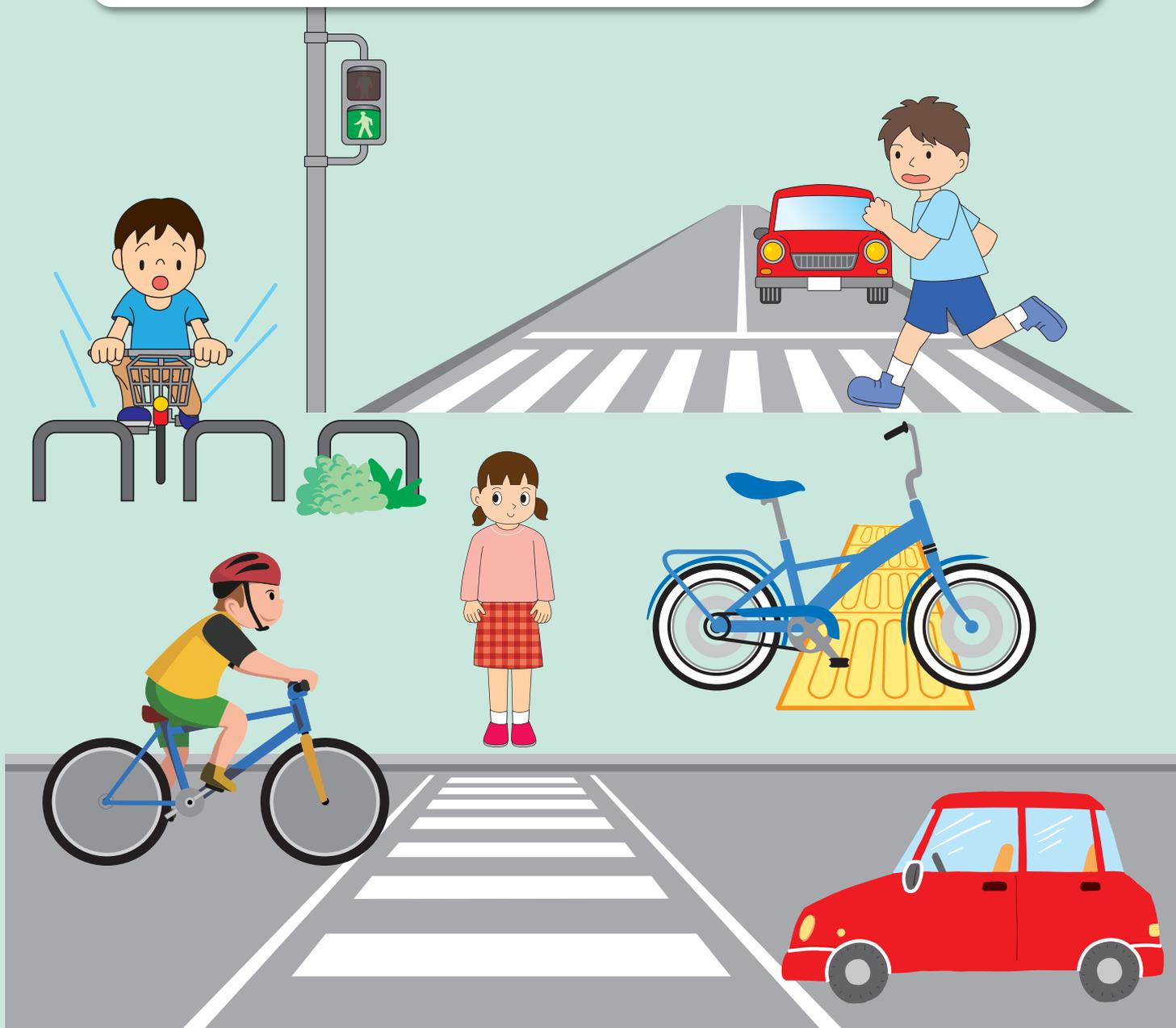


障害児・者のための 交通安全



堀 清 和 (兵庫医科大学)
宮 田 美恵子 (順天堂大学 NPO法人日本こどもの安全教育総合研究所)
鈴 木 彬 文 (障害者防災対策支援協会)
小 川 和 久 (東北工業大学)
村 上 佳 司 (一般社団法人PORO)

はじめに

この冊子は障害のある人の交通安全の向上と普及のために公益財団法人タカタ財団の研究助成を得て制作しました。

冊子を作るにあたって、障害のある子どもたちや支援施設を利用している成人の方、ご家族、支援者、学校の先生、関連機関の人々等、多くの人からお話をうかがいました。

調査で出会った障害のある子どもや人の中には、見た目には障害があるように見えない方もたくさんいました。聞き取りの中で驚かされたのは、交通被害に遭っている人の多さです。中でも深刻だと思ったのは、ひき逃げの被害にあっているのに誰にも相談していなかった方が複数いたことです。周りに学校の先生や家族、支援者、地域の人々、警察、各種相談機関等、相談できる人もいて相談できる場所もあったはずなのに、「これまで誰にも言っていない」との言葉を複数の方から聞いたときは衝撃を受けました。

「どうせ相談してもどうにもならない」「面倒くさい」「相談して大ごとにしたくない」「被害に遭った自分も悪い」等のあきらめの感情がその言葉には込められていました。明らかな犯罪被害に遭っているにもかかわらず、被害を受けても仕方がないと受け止めている様子でした。

一方で、長年地域で地道に啓発活動や相互支援活動に携わっている家族の方々からは生活に根差した説得力のある知恵をたくさんいただきました。子育て中の保護者の方々からは、子どもが被害者や加害者になってしまうのではないかと不安や戸惑いの声も多く寄せられました。この冊子の中で出てくる困りごととそれに対する具体的な対策・対処法の多くは子育ての中での実体験をまとめたものとなっています。

調査を進める中で、背景に複数の社会的課題が潜んでいることもわかってきました。高齢者や見た目から障害がわかる人には配慮するものの、支援の必要性がわかりづらい人への配慮に乏しい警察・公共交通機関の人々、移動支援に携わる人々の意識の低さとスキル不足、送迎時の対応や接遇の質、定型発達の子どもの前提にした交通安全教育の内容と指導方法、被害を受けたときに相談できる人・場所の少なさと相談支援業務に携わる人々のスキル不足、地域社会での孤立等、これらの複数の要因が重なり合い、立場の弱い人々に「相談しても仕方がない」というあきらめの感情を生じさせているのです。

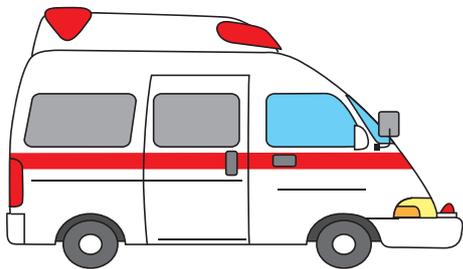
調査を通して、こんなに大切なことがなぜ放置されてきたのかとの疑問が湧くとともに、このような状況を改善するために地域の中で忍耐強く啓発活動に取り組んでこられた方々の思いにも胸を打たれました。障害のある人やその家族、支援者の思いが伝わり、それぞれの立場でできることを考えるきっかけにいただければ幸いです。

身近にこんな子、こんな人いませんか

言われたことをそのまま繰り返す



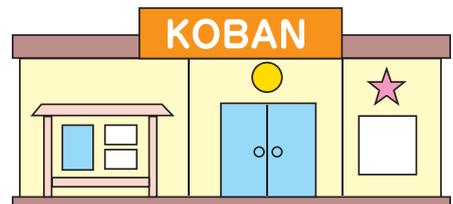
けがをしているのに平気そうな顔をしている



大したけがじゃないのに大騒ぎしているように見える

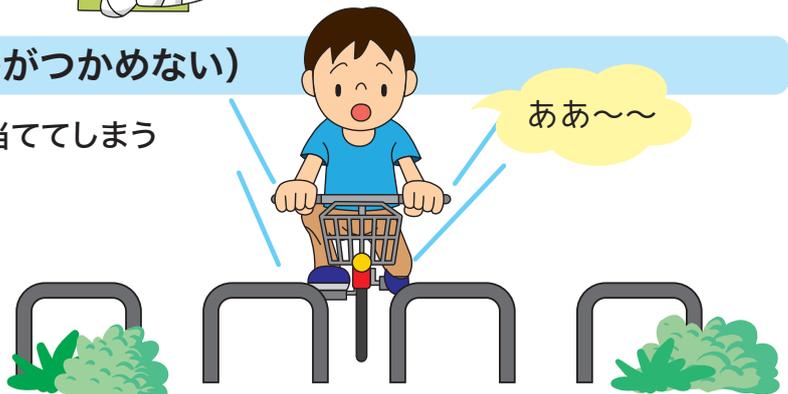


深刻な状況なのに笑顔でニヤニヤしていてふざけているように見える



人や物によくぶつかる(距離感がつかめない)

かばんや傘等を周囲のものや人に当ててしまう





何らかの障害のある人は相手の言っている内容を理解せずに

そのまま言われたことを繰り返すことがあります。

この場合、大丈夫だと答えたからといって、本当に大丈夫だとは限りません。

理解していなくても、すべての返答を「はい」で答えてしまう人もいます。



対応

「痛いところがあったら教えてね」

「わからないことはありますか？」

「何かお手伝いできることはありますか？」のような尋ね方をすると質問内容を理解しているかどうかわかりやすくなります。

痛みの感覚が鈍いため、けがをしているのに気付いていないことがあります。

表情の変化が乏しく言葉でうまく表現できないため

本当は痛いのに伝えられないこともあります。

このほか、痛みを感じていても、痛みとけがの因果関係を理解できないため、

けがをしていることを、人に伝えられないこともあります。

痛みの感覚が鋭いために、普通の人では我慢できるようなすり傷でも

本人にとっては苦痛に感じて、助けを求めていることがあります。

身体的な痛みはあまり感じていなくても、

精神的ショックを受けたために感情を制御できなくなって騒いでいることもあります。

自分が大切にされているか確認するために騒いでいることもあります。

本人が実際に感じている感情と顔の表情が連動しづらい人がいます。このような人の場合、

本人は非常に怖い思いをしているのに、はたから見ると**状況を理解せずに笑っている**、

または、**ふざけている**ように見えることがあります。

「こんなときにふざけてはいけません」と叱ってしまうと、本人はふざけているつもりはないので困惑し、余計不安に陥ります。

恐怖を感じたときに感情が表情に出ない人や笑っているように見える人もいるので、

頭ごなしの叱責ではなく「どうしたの？」

「何か困ったことがあるの？」といった声かけをして様子を見ましょう。

空間認知能力が低いために、自分の体の大きさと周囲にあるものとの距離感をつかむことが苦手な人がいます。そのため、自分の周囲にあるものとのどのくらいの距離を保てばいいかというイメージがつかみづらくなります。

傘やかばん等自分の所有物、自転車の大きさと、周囲にあるものとの距離、すれ違う人とぶつからないように意識することが難しくなることもあります。

脳の損傷による麻痺や高次脳機能障害がある人の中には、**半側空間無視**の症状が見られることがあります。

これは、視力に問題がなくても片側の空間を認識しづらくなる症状で、認識しづらい方向にある障害物や危険物、人とぶつかりやすくなります(P50参照)。

身近にこんな子、こんな人いませんか

同じところで何度もこける けがをする



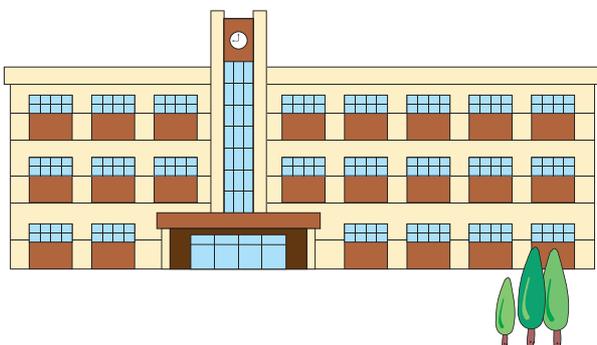
信号が青に変わったとたん急に走り出す



信号は見ているが信号以外まったく見ていない



道に迷いやすい



どっちかな?





注意力の欠如や**興味のあるものに気を取られてしまう**ことで

わずかな段差に気付かず同じ場所で何度も転倒したりけがをしたりすることがあります。
注意の必要性を意識はしていても不器用なため
体がうまく反応しないこともあります。
まれに脳腫瘍等の病気の症状として現れることもあります。

きまりを理解して守ることはできるものの、
じっと待つことが苦手なため**(衝動性)**
信号の色が変わった途端に
走り出すことがあります。

衝動性
については
P48の
ADHDの
解説をご参照ください。



視野が狭い、一つのことに集中すると**周りへの注意力が低下する**、
融通がきかず**言われたことを文字通り実行してしまう**等の理由により、
教えられたとおり信号は確認しているのですが、
周囲にあるものに注意が払えないことがあります。そのため、
周囲の通行人や自転車、左折する車等にぶつかってしまいやすくなります。

空間認知能力が低い**ため**現在地が
わからなくなることや地図を見ても
位置関係を理解しづらいこと、
歩いてきた道を忘れてしまうこともあります。
そのため道に迷いやすくなります。

空間認知能力
については
P48の
自閉症スペクトラムの
解説をご参照ください。



身近にこんな子、こんな人いませんか

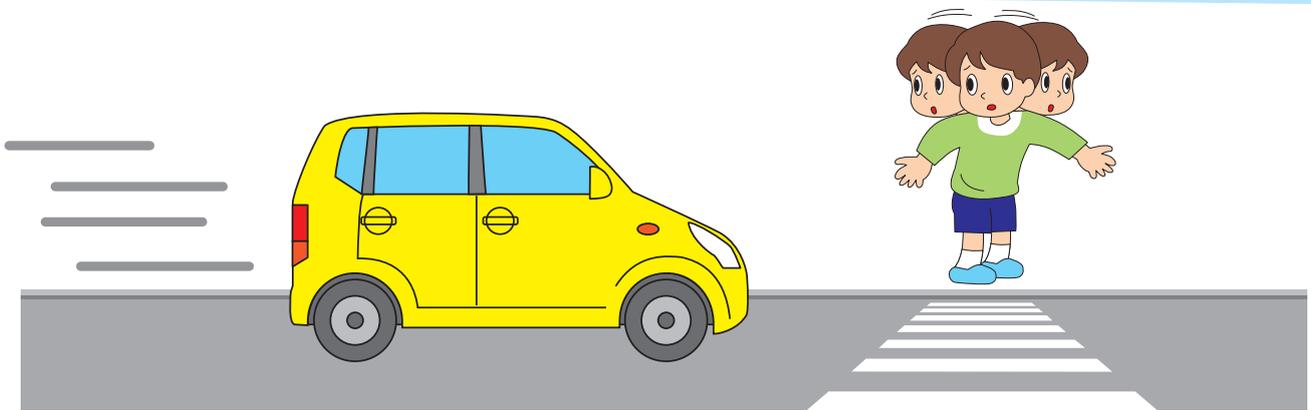
急にとびだす、左右確認せずに横断する



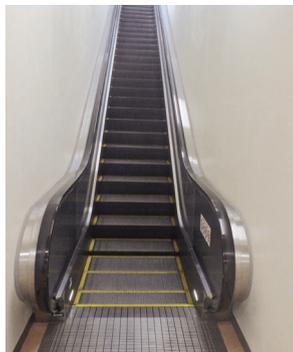
急に立ち止まる、しゃがみこむ



左右確認をしようとするが、確認した後、移動するときには車が来ている



エスカレーターに乗ること、降りることが苦手





子どもは大人より視野が狭いのですが、**自閉症スペクトラム**の特性のある子・人は定型発達の子・人よりもさらに視野が狭い傾向にあります。
また、キラキラしたものやくるくる回るもの等に強い関心を示すことも多く、興味のあるものが視界に入ると気になるものの近くへ行こうと急に走り出すこともあります。何か夢中になったり考え事をしたりする等、一つのことに関心が集中して注意力が欠如することにより、周りへの注意が低下した状態で、興味のあるものを触りに行くこともあります。

何か興味があるものを発見したとき、周囲の状況を確認せずに急に立ち止まることがあります。本人は危険な状況にいることに気付いていないことがあるので、このようなときは注意喚起して安全な場所に誘導します。
感覚過敏（光やにおい、音等に対して一般の人よりも過敏に感じること）により、体調が悪化したときにも急に立ち止まったりしゃがみこんだりすることがあります。安全な場所に誘導して休憩させましょう。

自閉症スペクトラム、感覚過敏についてはP48の解説をご参照ください。

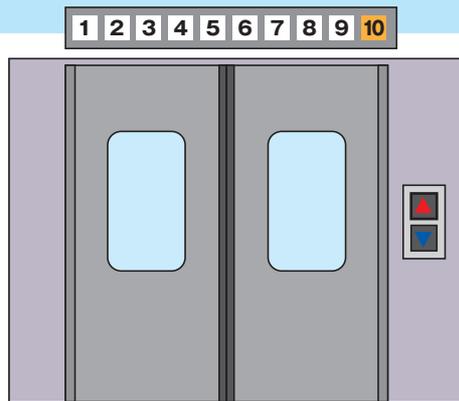


動作が緩慢なため左右の確認をしているのに移動をしようとしているときには車が来てしまい危険な状況に陥ることがあります。左右を見なさいと言われて言われた通り首を左右に振ってはいますが首を動かしているだけで実際には車の確認をしていないことや急いでいるため注意力が低下して、見落としていることもあります。

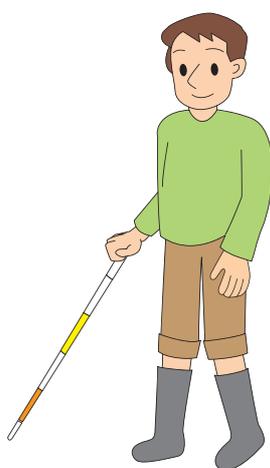
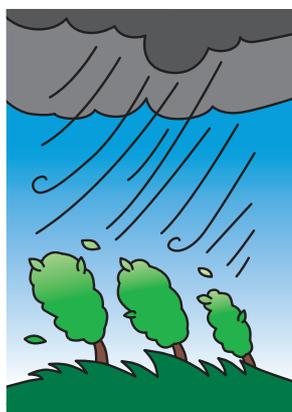
複数の動作を同時に行うことが苦手、不器用、距離感をつかむことが苦手等の理由によりエスカレーターに乗る、降りるタイミングをつかむことが苦手な人がいます。

身近にこんな子、こんな人いませんか

エレベーター等の閉鎖空間が苦手



荒天時に危険性が高まる(視覚障害、身体障害、歩行のふらつきのある人)



コミュニケーション上の困難



話しかけても返事がない 会話が成立しない





狭い空間にいることが苦手、
他人が自分の近くによって来ることが苦手等の理由により、
エレベーターのような**狭い場所が苦手な人**がいます。
混雑したバス等でも、他人と密着することが苦手な人や、
ざわざわした雰囲気は苦手等の理由により乗れなくなる人もいます。
反対に、規則的な動きを好み、機械が好きな人の場合、
いつまでもエレベーターが上下するのを見ていることもあります。



視覚障害により、杖や音を頼りに移動している人は、
雨の音や風の音にさえぎられて、歩行者や自転車、
車の接近に気付きにくくなることや、
音響装置付信号機の音を聞き取りづらくなる場合があります。
積雪のため、杖がうまく使いづらくなることや歩道と
車道の境がわからなくなること、
道路上の凹凸のある目印を見落としやすくなることがあり
事故に遭遇する危険性が高まります。

視覚障害
については
P49の解説を
ご参照ください。



状況が理解できない、うまく話せない等の理由で
ごめんなさいが言えないことがあります。
「けがはない？学校はどこ？おうちの電話番号は言える？」等
複数のことを一度に言われると混乱することもあります。

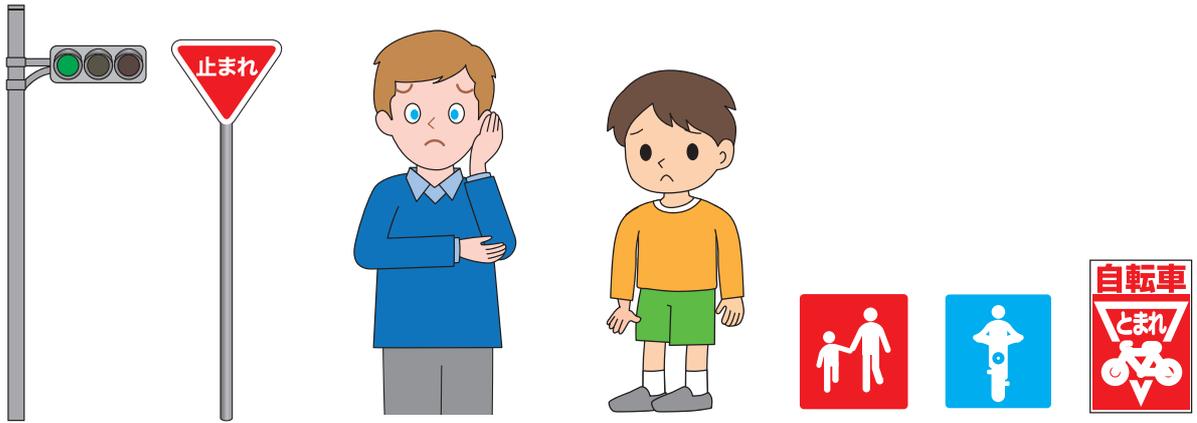
やさしい日本語
(P52～P55参照)や
短い言葉で話しかけると
理解しやすくなります。



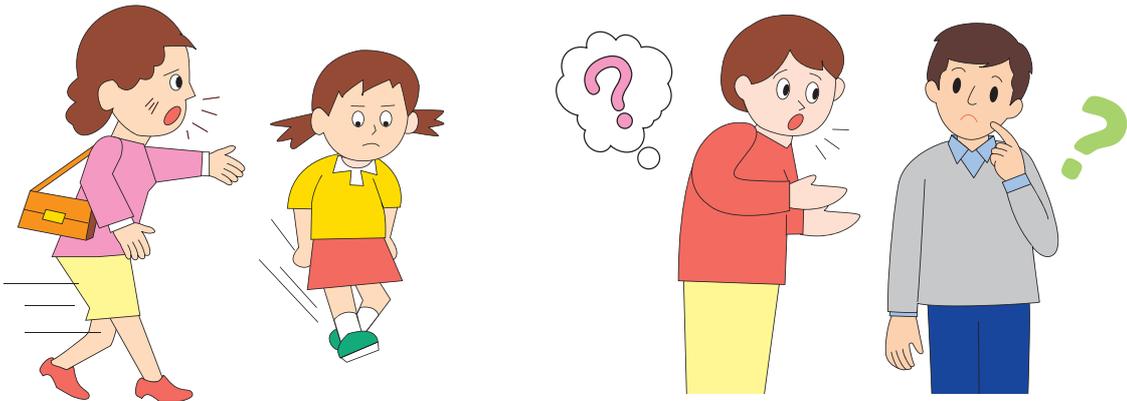
高齢者だけではなく健康そうに見える若い人の中にも**意思疎通が難しい人**もいます。
認知症や知的障害、なんらかの**精神疾患**、**聴覚障害**で
音が聞き取りづらい等さまざまな理由が考えられます。
日本人のように見えても、両親または親のどちらかの母語が日本語でないため、
日本語が理解しづらい場合もあります。平易な日本語で伝えたり、身振り手振りで伝えたり
することで理解しやすくなることもあります。
外国人のように見えても、すべての人が英語を理解できるとは限りません。

その他障害に起因する困りごと

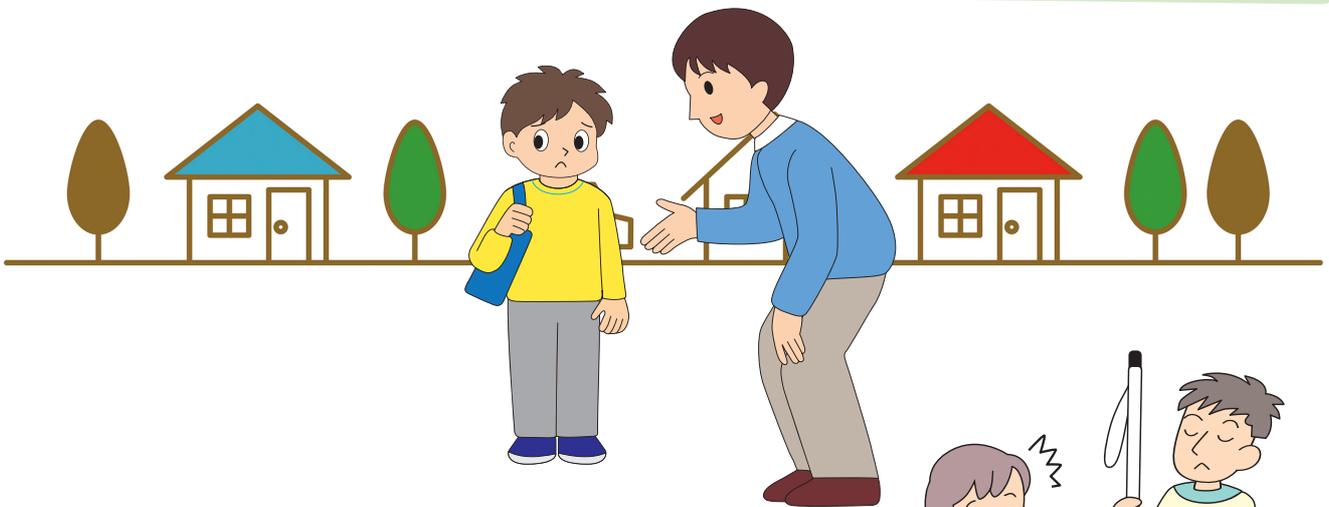
信号や標識、看板、地図の意味が理解できない



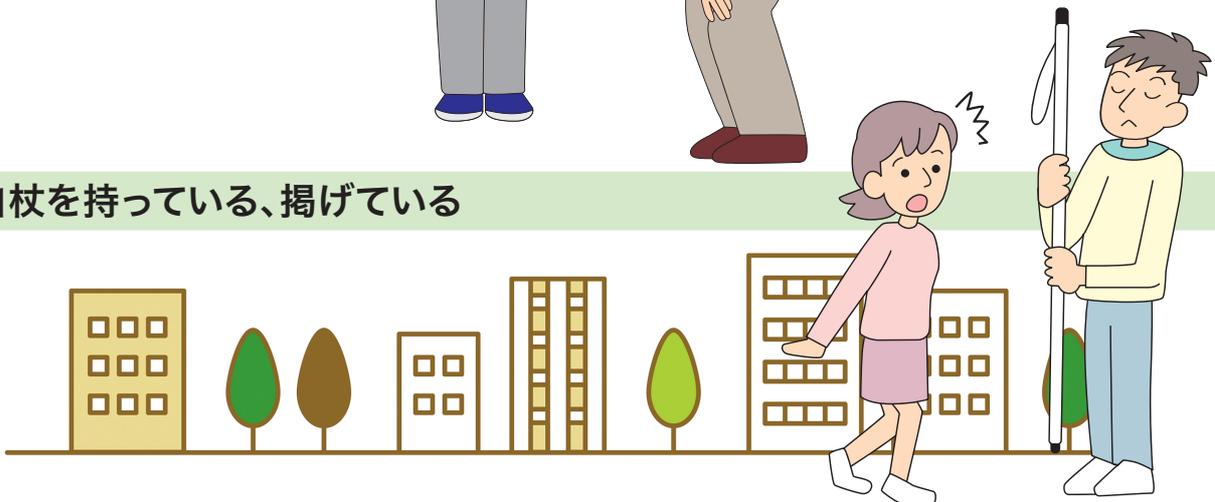
案内をしようと思ってもうまくつたわらない



認知症や自閉症スペクトラム、知的障害のある人



白杖を持っている、掲げている





日本の文化・制度に不慣れな人や**知的障害**のある人の場合、信号や道路標識の意味が理解できないことがあります。その結果、歩車分離式信号や押しボタン式信号のある横断歩道で、うまくわたれないことがあります。看板や地図から情報を読み取れないこともあります。

やさしい日本語
(P52~P55)
を用いると
理解しやす
くなります。



その他障害に起因する困りごと

聴覚障害がある場合、声かけしても無視しているように見える場合があります。
視覚障害がある場合、あっちこっち等の指示代名詞を使うと伝わらないことがあります。時計の位置で伝えましょう(例えば、右方向を伝えるときは「3時の方向に〇〇があります」等)
視覚障害のある人の案内をするときは、支援者は相手の了解を得た上で半歩前に立ち、白杖を持っていない方の手で支援者の肘のあたりをつかんでもらいます。衣服や白杖を引っ張ったり背後から押したりしないようにします。

自閉症スペクトラムについてはP48、視覚障害についてはP49、認知症についてはP50の解説をご参照ください。



認知症や**自閉症スペクトラム**、**知的障害**のある人は何も言わずにいきなり体に触れるとびっくりして興奮状態に陥ることがあります。後ろからいきなり声をかけられてもびっくりすることもあります。これは**視覚・聴覚**に障害がある人に対しても同様です。
視覚障害がある人も、いきなり体をつかまれると驚きますし
聴覚障害がある人は後ろから声かけしても気づかないことがあります。体に触れる場合は、相手から見える位置で、これから体に触れる旨を伝えましょう。
目線が合うと恐怖を感じる人もいるので、おびえている様子がみられるときは無理に目線を合わせないようにします。

白杖を持って歩いている人は**視覚に障害**のある人です。白杖を頭上に掲げているときは困っている合図です。このような人を見かけたら声かけしましょう。

その他障害に起因する困りごと

体や所持品に触れるとき



点字ブロックや災害時の避難経路付近には障害物となるものを置かない





誘導やヘルプマーク等を確認する際に体に触れる必要があるときがあります。
いきなり体に触れるとびっくりして騒ぎだしてしまう人もいます。
かばんの中身を確認しようとしたときに、
大切なものをとられると思って騒ぐ人もいます。
体や所持品に触れるときは、「お体にふれますね」「かばんの中を見てもいい？」
のような声かけをするようにしてください。
声かけするときも大きな声にびっくりしてしまうこともあります。
ゆっくり、おだやかな口調で話しかけてください。



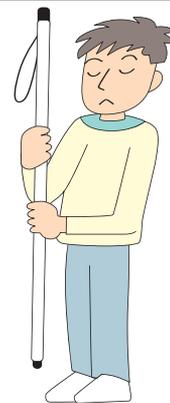
違法駐車や放置自転車は視覚に障害のある人や身体に障害のある人だけではなく、
自閉症スペクトラム等の障害特性により自分と物との距離感をつかみづらい人にとっても
危険な存在となります。

特に点字ブロック付近には駐車、駐輪はしないでください。

聴覚に障害のある人は自転車のベル、
車のクラクションを
鳴らしても気付かないことがあります。
音で気付かない可能性も考えて
安全な運転を心がけてください。



白杖を持っている人は視覚に障害がある人です。
白杖を頭上に掲げているときは助けを求めているサインです。
白杖を掲げていなくても困っている様子が見られるときは
声かけしてください。
駅や公共施設では近くの駅員や職員に困っている人がいる旨を
伝える方法もあります。



点字ブロックの上に自転車や荷物等を置いていると
視覚に障害のある人の移動の妨げになります。
建物内の避難経路や階段、非常口付近に移動の妨げになるものを放置していると、
視覚に障害のある人や歩行が困難な人が災害時に避難しづらくなることがあります。
点字ブロックや避難経路には不必要なものが置かれないようにしてください。

その他障害に起因する困りごと



体にふれるとき

けがしてないかみますね。
からだにさわってもいいですか？

わからないことはありますか？

等と確認を入れながら会話をする

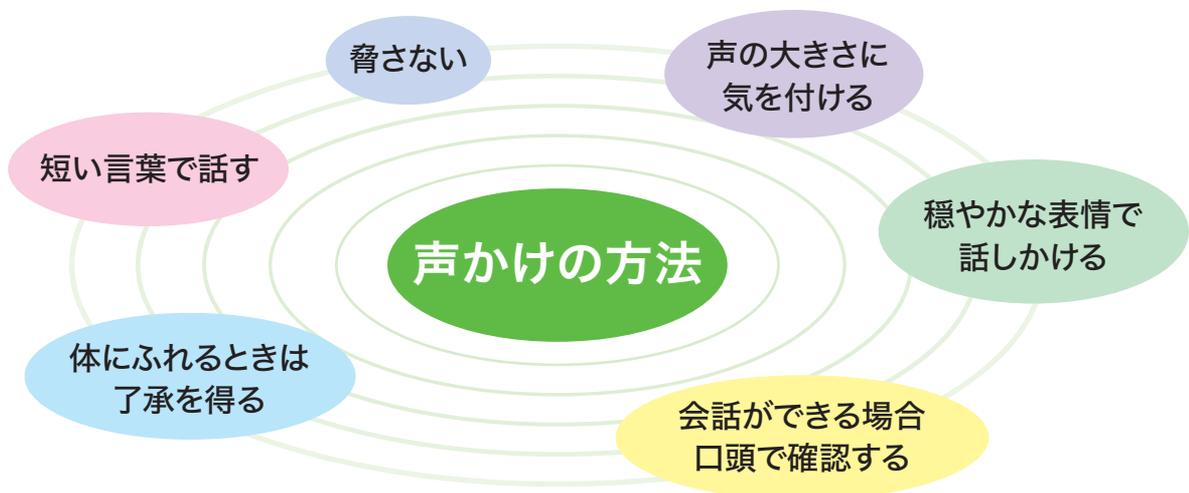
(わかりますか？と聞くとわかりますとおうむ返しすることもあります)

(わかりますかと言われるとわからなくてもはいと答える人もいます)

対応方法がわからない場合は

→放置せずに交番や学校等に知らせる

→家族・支援者の連絡先が所持品にないか確認する

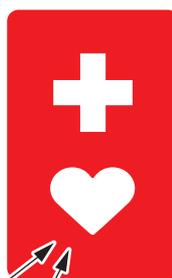


ヘルプマーク

外見では障害があることがわかりづらい人、配慮を必要としている人がつけているマークです。

多くの場合、裏面やパスケースの中に障害特性、必要な支援、支援者、家族の連絡先が書かれています。

ヘルプカードと呼ばれるヘルプマークがついたカード型のものもあります。



ヘルプマーク

シールにこのような事を書いて
貼っておくと
助けてくれやすくなります。

ストラップ型

困っていそうなときは
裏面を見てください。

パスケース型

困っていそうなときは
中をあけてみてください。



明るい所



暗い所で車のライトが当たると
反射材がピカッと光ります。

夜間の安全

夕方や夜間には車を運転している人からは歩行者が見えにくくなります。

明るい色の服や反射板を身に付けることで安全性が高まります。



知ってもらいたいこと



声かけの仕方

質問の仕方には、「はい」「いいえ」でこたえられる質問と、「おうちの人はどこですか」のように「はい」「いいえ」でこたえられない質問があります。意思疎通が困難な人の場合、「はい」「いいえ」でこたえられる質問の方が答えやすくなります。しゃべることが苦手な人の場合も「はい」「いいえ」でこたえられる質問をすれば頭を動かすことで意思表示がしやすくなります。

コミュニケーションボードや絵カード、具体的なものを示して話しかけると理解しやすくなります。

「はい」「いいえ」でこたえられる質問をする場合も、言われたことをそのまま繰り返す人がいるので注意が必要です。(大丈夫? ダイジョウブ等) また、意思疎通が困難な人の中にはどんな質問でも「はい」と答えてしまう人がいます。「言っていることがわかりますか」という聞き方をするとわかっていなくても「はい」と答えることがあるので、「今までの話の中でわからないことはありますか?」という聞き方をすると本当に理解しているかどうか判断しやすくなります。

話しかけてもなかなか
要領を得ない人の中には、
筆談であれば意思疎通できる人もいます。
その人に合わせて意思疎通の方法を
工夫してください。



その他障害に起因する困りごと

注意力の低下を引き起こす要因



交通事故の危険性を高める注意力の低下は障害特性だけで起こるものではありません。風邪や病気、睡眠不足、熱中症等による体調不良、服用している薬の副作用、不安や焦り、緊張、遅刻しそうになって急いでいる等の心理的要因、悩み事や考え事をしているとき、社会的に孤立していて自分なんてどうなってもいいと考えている状態(セルフネグレクト)のとき、猛暑や荒天等の環境要因、いつも通る道が工事中や交通量が増加している、履きなれていない靴を履いているとき、いつもと違った状況が発生しているとき等々、さまざまな要因が複合的に合わさって危険性が高まるもので、これは障害のない人にとっても同様です。体調が悪そうなときや様子がおかしいときは声かけをしたり休むように促すことで事故に遭う危険性を低下させることにつながります。



統計から



子どもの交通事故は、学年別では小学校、中学校、高等学校
全校種に共通して1年生が多く学年が上がるにつれて減少する傾向があります。
小学校では下校中の事故が60%、
中学校は登校・下校で半々、高校では登校中が60%
通学方法別では小学校は徒歩の事故が98%
中学校は自転車事故が63%、高校は自転車事故が73%、
月別では**5月6月**が最も多く**10月11月**にも多発しています。
10月11月は、季節の変わり目で早い時間に暗くなるのが影響しているのかもしれませんが。
歩行中の交通事故死亡者は小学校1～3年生で多く**小学校1年生が最も多くなっています**。
特に、学校入学後に事故に遭いやすい傾向があります。
幼稚園までは送迎や保護者の付き添いがあったのが、小学校に入ると一人で登下校するよう
に変わるため、慣れない時期に事故に遭いやすくなると考えられます。
小学生の交通事故の要因として、**飛び出し、信号無視等交通ルール違反**による死亡事故が
多くなっています。
平成26年度小学生の歩行中の事故状況：飛び出し65.4%(274件)、信号無視13.6%(57件)
また、幼児の死亡事故では、家族等が運転する車に同乗している際の事故が多くなっています。

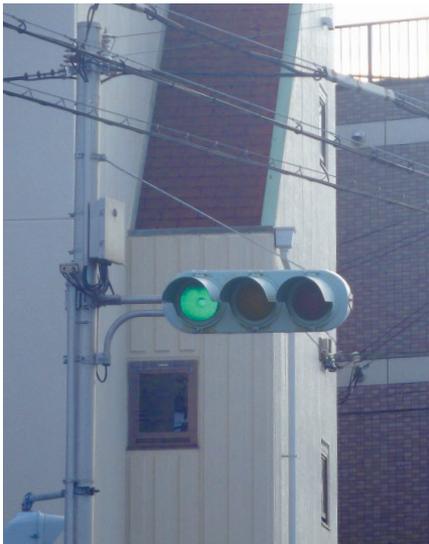


参考文献・引用データ出典

- 平成26年3月独立行政法人日本スポーツ振興センター通学中の事故の現状と事故防止の留意点
ITARDA Information 交通事故りポートNo.116山口明氏「子どもの歩行中の事故」



さまざまな信号機



その他障害に起因する困りごと

意思疎通が困難な人の場合、事故に遭っているのに家族や先生、支援者に何も言わないことがあります。

危険な目に合ったことを伝えると怒られると思っているのかもしれませんが、いろいろ訊問されるのが面倒なのかもしれません。

家族に自分のことで心配をかけたくないという思いがあるのかもしれませんが、

自分を車ではねた加害者に

「お前のせいで車が傷ついてしまった。弁償しろ」と脅され、

自分の方が悪いと思わされて、

被害者なのに警察に捕まるのではないかと

おびえていることもあります。



服が汚れていたり自転車が傷ついていたるときは、

注意をする前に「大丈夫？」と声かけをしましょう。

やさしい言葉をかけられると安心して何か伝えてくれるようになるかもしれません。

開口一番、いきなり注意をすると何も言わなくなることがあるので

まずは**やさしい言葉**で「大切なあなたがけがをしていないか心配している」ことを伝えます。

そして、落ち着きが見られた後に今度からは気を付けようねと注意を促すようにしましょう。

言葉で伝えることが苦手な人の場合、

どこで何があったかあれこれ尋ねられることがうっとうしく感じて何も答えないこともあります。

服装が汚れている等の異常が見られた場合、

紙に書いてもらう、絵カードやタブレットを使うといった意思疎通の方法もあります。

いずれの場合も無理に聞き出そうとすると、

拒否反応を示して何も言わなくなったり何もなかったとごまかしたりすることがあります。

拒否反応が見られた場合は、無理に聞き出そうとせずに、

受け入れられるような状態になるまで待ってみましょう。

中には、家族には絶対に言わないのに、気心の知れた支援者には言ってくれる場合もあります。

人を変えて別の機会に尋ねてみるのも一つの方法です。



ヘルプマーク ヘルプカード 防災カード



ヘルプマーク



ヘルプカード

防災カード 見本

緊急時の連絡先		防災カード	
氏名	電話	氏名	性別 生年月日
住所			男・女
氏名	電話	住所	
住所			
かかりつけの医療機関			
氏名	電話	自宅電話	
住所		携帯電話番号	
家族の集合場所		血液型	
家族の避難場所		病名	
学校名		飲んでいる薬	
学校電話番号		アレルギー	
		必要な支援	

防災カード

見ただ目で障害があることがわかりづらい人や意思疎通が困難な人は

緊急時に自分から助けを求めることが難しくなります。何か困ったときや災害発生時に備えて、ヘルプマーク、ヘルプカード、防災カードを作成して所持させておくことで役に立ちます。

防犯上の理由で見える位置にヘルプマークや個人情報が見えるものを身に付けさせることに不安を感じる場合、いつもはカバンやポケットの中に入れておき困ったときに見せるように指導するという方法もあります。

人に見せることが困難な場合は、所持品やポケットの中に入れておくだけでも緊急時に役に立つことがあります。

例えば

交通事故や発作等で救急搬送されたとき、搬送先で医療職の人に見つけてもらうことがあります。血液型やアレルギー、飲んでいる薬がわかれば早期に適切な治療を受けることができます。

服用している薬がない場合やアレルギーがない場合も、薬を服用していないこと、アレルギーがないことを記載しておきましょう。

特定の薬を飲んでいないことやアレルギーがないという情報があるだけでも治療の選択肢が広がります。

距離感がつかめない

歩行や自転車の運転の際、自分の体の大きさと扉や車止め等の障害物、人や車との距離感をつかみづらい人がいます。

道幅が狭く通りづらい道や障害物の多い道で何度も同じところにぶつかっているかもしれません。

道幅が広い安全な道を通るように指導しましょう。

傘やかばんを持っているとき、周囲の人や物との間隔をつかむのが苦手な人もいます。本人は悪気はないのに無自覚に周囲の人や物に荷物をぶつけてしまうことがあります。雨天時や手に荷物を持っているとき、リュックサックを背負っているとき等は、事前に気を付けるよう声かけすることで注意を払いやすくなります。

荒天時

台風や大雨による増水、大雪等のときに、いつもと違う光景を確認しにいかないと気がすまず、危ない場所に勝手に出かけてしまう人がいます。

報道でいつもと違う近所の映像をテレビで見ると興奮してしまうことがあります。

このような傾向のある人には、荒天時には刺激的な映像をなるべく見せず、口頭で必要な情報を伝えたり、文字が読める場合は文章による客観的な情報で必要な情報を伝えるようにします。



ヘルプマーク ヘルプカード 防災カード



ヘルプマーク



ヘルプカード

防災カード 見本

緊急時の連絡先		防災カード	
氏名	電話	氏名	性別 生年月日
住所			男・女
氏名	電話	住所	
住所			
かかりつけの医療機関		自宅電話	
氏名	電話	携帯電話番号	
住所		血液型	
家族の集合場所		病名	
家族の避難場所		飲んでいる薬	
学校名		アレルギー	
学校電話番号		必要な支援	

防災カード

見ただ目で障害があることがわかりづらい人や意思疎通が困難な人は

緊急時に自分から助けを求めることが難しくなります。何か困ったときや災害発生時に備えて、ヘルプマーク、ヘルプカード、防災カードを作成して所持させておくことで役に立ちます。

防犯上の理由で見える位置にヘルプマークや個人情報が見えるものを身に付けさせることに不安を感じる場合、いつもはカバンやポケットの中に入れておき困ったときに見せるように指導するという方法もあります。

人に見せることが困難な場合は、所持品やポケットの中に入れておくだけでも緊急時に役に立つことがあります。

例えば

交通事故や発作等で救急搬送されたとき、搬送先で医療職の人に見つけてもらうことがあります。血液型やアレルギー、飲んでいる薬がわかれば早期に適切な治療を受けることができます。服用している薬がない場合やアレルギーがない場合も、薬を服用していないこと、アレルギーがないことを記載しておきましょう。

特定の薬を飲んでいないことやアレルギーがないという情報があるだけでも治療の選択肢が広がります。

距離感がつかめない

歩行や自転車の運転の際、自分の体の大きさと扉や車止め等の障害物、人や車との距離感をつかみづらい人がいます。

道幅が狭く通りづらい道や障害物の多い道で何度も同じところにぶつかっているかもしれません。道幅が広い安全な道を通るように指導しましょう。

傘やかばんを持っているとき、周囲の人や物との間隔をつかむのが苦手な人もいます。本人は悪気はないのに無自覚に周囲の人や物に荷物をぶつけてしまうことがあります。雨天時や手に荷物を持っているとき、リュックサックを背負っているとき等は、事前に気を付けるよう声かけすることで注意を払いやすくなります。

荒天時

台風や大雨による増水、大雪等のときに、いつもと違う光景を確認しにいかないと気がすまず、危ない場所に勝手に出かけてしまう人がいます。

報道でいつもと違う近所の映像をテレビで見ると興奮してしまうことがあります。このような傾向のある人には、荒天時には刺激的な映像をなるべく見せず、口頭で必要な情報を伝えたり、文字が読める場合は文章による客観的な情報で必要な情報を伝えるようにします。

家族の方へ



自転車に悪戯(パンク、かごにごみを入れられる等)をされた。



中学生数人に囲まれて進行を妨害された上キモい等の暴言を受けた。
このケースでは、施設で相談後当該の中学生を探して注意した。



ひき逃げされた。
このケースでは、
警察に相談するも証言が困難なため初期対応が遅れた。
交通課と警ら課の連携不足で困った。



乗車したタクシーの運転手がわざと遠回りして多額の料金を払わされた。



支援者からの声

通行中に利用者のカバンがすれ違った外国人のお子さんにあたり、
付添いの職員が謝罪したが本人の態度が悪いと納得してもらえず
施設で警察を交えて説明した。



施設に来たとき服にタイヤ痕がついていてどう見てもひき逃げされた
状態だったが本人に確認したところ大丈夫の一点張り。
その後警察に連絡してひき逃げした中年女性を探し出した。
加害者が言うには、車がぶつかった後本人に怪我はないか尋ねたが
大丈夫だと言って去ったので事故の届け出をしなかったとのこと。



送迎車が軽微な事故を起こしたとの話はよく聞く。
通常の事故と同じ手続きを踏むが軽微な事故の場合、
同乗する利用者に状況を説明しない場合もある。



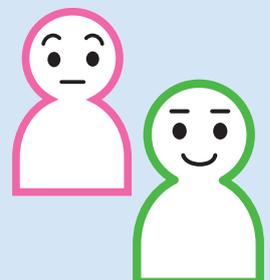
車に接触後、運転手が下りてきてけがの状態を尋ねようとしたところ何も言わずに逃げ出した。



一般企業に就職できたが送迎車生活が長かったため
電車に乗ることができず企業側に送迎してもらえないか
打診したところ難しいとの返答が来て一般就職を断念。



車と接触したケースで、事故後逃げ出した。運転手がいい人だったので男児を追いかけて
けがの様子を尋ね、事故の届けを出したが、
そうでなければ当て逃げされていたかもしれない。
このケースでは幸い大きなけがはなかった。
家庭で交通安全について厳しく言われていたので飛び出しをしたことを
保護者に怒られると思って黙って逃げたのかも。
交通ルールの順守だけではなくけがをしたら報告すること、
その際大人は怒らないことも伝えたほうがよいのでは？



指導の際

知的・発達障害のある子どもの傾向として、「廊下を走ってはいけません」のように否定語で指導すると、走ることはやめるのですが、歩いてよいことが理解できず、適切な行動がとれないことがあります。

「廊下は歩きましょう」のように、望ましい行動を肯定的に伝えるようにしましょう。

「そんなことしてると本当に事故に遭って死んでしまうよ」のような脅しの言葉を用いると、その場所を通ることができなくなる等の悪影響が出る場合があります。

知的・発達障害のある子どもの中には、ショッキングな写真や映像、事故のシミュレーションを見ると体調や精神状態に悪影響が出てしまう子がいます。このような特性のある子にはできる限り刺激的な視覚情報を伴う指導は控えましょう。どうしても必要な場合は保護者と相談をする、本人に事前に内容を伝えてショックを和らげる、休めるようなスペースを用意しておき、つらくなったら休んでもよいことを伝える等の配慮をしましょう。

荒天時の交通安全

台風や大雨等荒天時は、激しい雨の音や風の音で普段よりも音による情報が得にくくなり、視覚障害のある子は普段より事故に遭遇する危険性が高まります。降雪時は点字ブロックなど、道路上の手がかりが雪により埋もれたり、歩道と車道の境目がわかりづらくなることで危険性が高まります。荒天時には声かけによって注意を喚起するほか、危険性が高い場合は見守りの強化や保護者・代理人への引き渡しも検討しましょう。

荒天時の知的・発達障害のある子への対応

荒天や災害によりいつも見慣れている場所が様変わりしていることを知ると、自分の目で確かめないと気がすまなくなる子がいます。特に、知的・発達障害のある子でこの傾向が見られます。災害報道や写真、動画等、視覚情報でいつも見慣れている場所が一変している場面を見ると、黙って危険な場所に行こうとしやすくなるので、このような特性のある子には、視覚情報での伝達は控えて可能な限り文字情報や口頭で注意を喚起しましょう。

交通事故に遭遇しやすい学年

小学生では、入学後しばらくしてからの時期(5月6月)に1年生の事故が増える傾向にあります。それまで幼稚園バスで送迎してもらっていたり、保護者と通園していた子が一人で通学するようになり、学校にも慣れだして油断してしまうことが背景要因として考えられます。中学生や高校生でも、1年生の事故が多い傾向にあります。転校してきてしばらくたった時期にも注意が必要です。下校前の声かけで注意を喚起するようにしましょう。

事故が増加する季節

季節の変わり目で日没の時間が早くなる10月11月も事故が増える傾向にあります。



発達段階別の登下校時の交通事故の割合と要因

統計*によると、小学生では下校中の事故が60%、中学生では登校・下校で半々、高校では登校中が60%となっており、通学方法別でみると、小学生は徒歩の事故が98%、中学生になると自転車事故が63%に増え、高校は自転車事故が73%となっています。

(※平成26年3月独立行政法人日本スポーツ振興センター通学中の事故の現状と事故防止の留意点 よりデータ引用)

自転車に乗れるようになると被害者だけではなく加害者になる可能性も高まります。衝動性や注意欠陥、多動性の特性のある子は特に注意が必要となります。

地域で事故が多発している道、
危険な道があります。

地域住民はよく事故が起きていることを
知っているのですが、先生が知らないので注意喚起が
行き届いていないとの声が保護者からあります。

保護者や地域住民の交流を通して、事故が多発している
危険な道の情報を得て、子どもたちに気を付けるよう
呼びかけましょう。



スクールバス

障害特性を理解していないスクールバスの運転手の言動や乱暴な対応によってバスに乗れなくなって
しまう子がいることが保護者や支援者への聞き取り調査で判明しました。

スクールバスを利用する児童生徒がいる学校では運転手にプリントの配布等で特性を理解してもらい、
丁寧な対応をしてもらうようお願いすることも検討してください。

保護者への情報提供

保護者の中にも何らかの障害があったり、日本語が理解しづらい人もいます。
学校だより等の印刷物で情報提供をする際には端的でわかりやすい表現で
伝えることも検討してください(→P52～P55やさしい日本語参照)。

施設の方、支援者へ

接 遇

移動支援や送迎の際、乱暴な声かけや無理やり腕をひっぱる、無視する等、不適切な対応をすることにより、その後、精神状態が悪化してしまい、家庭や学校、施設で不穏行動をとってしまう利用者がいます。特に、**自分で不安や不満の意志を表明できない利用者**の場合、深刻な心の傷を負ってしまうことがあります。移動の支援は単なる物理的な移動の支援ではなく、対人支援です。**言葉かけや対応には十分気を付けましょう。**

ドライバーの対応

大きな声で怒鳴る、舌打ちする、話しかけても無視する等、ドライバーの対応が粗暴なために送迎車やバスに乗れなくなってしまう利用者がいます。送迎業務は別業者に委託している施設もあり、ドライバーへの指導や助言が困難なケースもあると思いますが、ドライバーにはそれぞれの**障害特性**を理解してもらい、**丁寧な対応**を心がけるように施設側からも伝えてください。

怖い目に遭ったときに声かけをしてもらえないと不安や疎外感を強く感じる場合があります。たとえしゃべることができない利用者であっても、急ブレーキ等で怖い目に遭ったときは、「大丈夫だった?」「怖かったね」等の**声かけ**をしてください。

中には保護者がいないときに家の前で放置されるというひどいケースもあるとききます。家の前であってもそのまま行方不明になることもありますので、原則として保護者に引き渡して、安全に帰宅させるところまでが送迎業務だと考えてください。



乗降時の安全確認

車の乗り降りの際に他の利用者がいるのに自分が乗り降りを終えると反射的にドアを閉めてしまう人がいます。一人ひとりの名前を呼びながら安全確認する等、**ドアの開閉には十分気を付けてください。**

車に乗ることが苦手な利用者

中には**車に乗ることが苦手な人**もいます。苦手な理由として、狭い空間で苦痛を感じる、他の人が自分の隣に座ることに恐怖や緊張を感じる、シートベルトを着用することに苦痛を感じる等さまざまな理由があります。車が苦手な利用者であっても、乗車時間の大体の目安を伝え、座席表等でどの座席に座るのか、スケジュール表や絵カード等で何時に出発して何時に到着するのか、どこへ向かって何をするのかを伝えることで見通しが立って乗車しやすくなることもあります。車に乗れない他の理由として、平衡感覚をつかさどる三半規管が敏感で車酔いが激しいといった身体的な要因で車が苦手な人もいます。この場合は代替の移動手段や他のサービスの利用も検討する必要があります。車に乗りたくない、乗れないと訴える利用者の場合、**その理由を考えること**で適切な支援につながることもあります。



送迎に関する困りごと

送迎車の大きさや数、送迎業務に割ける人員等の問題で、対応することが困難なケースはあるでしょうが、利用者の中には次のような声もあります。送迎時に下記のような点で我慢をしている利用者がいないか見直してみて、可能な限り対応を検討してください。

利用者の声



同乗者(同じ車に乗る利用者)について



いつも隣に座る人(利用者)が叩いてきたり悪口を言ってきたりするので嫌だけど我慢している

同性介助の視点



トイレに行きたくなったとき、異性のスタッフに言うのは恥ずかしい



異性のスタッフ(男性)だと怖いと感じることがある

災害時の交通安全

何らかの障害のある人は荒天時に通所、通学の危険性が高まります。大規模災害でなくても、大雨や強風でも危険は高くなります。

施設の営業の可否の判断基準・交通機関マヒ時の対応

2018年6月に発生した大阪北部地震や2018年9月の大型台風の際には電話がつながりにくかったため施設を休業するかどうか保護者から連絡が殺到して業務に支障が出た施設、休業を決定しても利用者がやってきたため施設を開けざるを得なかった施設、交通機関がマヒしたためグループホームの世話人がグループホームを開けることができず日中活動施設に時間を超過して預かってもらうよう依頼したケース等大きな混乱がありました。

災害発生時の利用者やその家族、関連施設への**連絡体制**や**連絡方法**は日頃から検討しておくことにしましょう。

施設スタッフが来られないとき、帰宅困難時や送迎で渋滞した際の利用者への対応、応援要請についても検討してください。

災害等で大規模停電が起きると、医療的ケアを必要とする人にとっては死活問題となります。

また、停電によりエレベーターの停止や断水(ポンプを電気で動かしている建物は停電時に断水が起こることがあります)、スマホのバッテリー切れで連絡や情報収集、応援の要請ができなくなることも起こります。充電器を備えておくほか、公衆電話の位置を知っておくことも大規模通信障害や大規模災害発生時に役に立ちます。停電の際の対応も検討しておきましょう。

荒天時



てんかんや高次脳機能障害のある人は、大雨や台風等の気圧の変化があるとき、気温の変化があるときに、体調を崩しやすくなります。とくに台風のときは、発作を起こしやすい傾向にあるので、転倒の危険性も高まります。また、体温調節機能が弱い人は熱中症の危険性も高まります。猛暑時、厳寒時は特に安全に留意してください。

バスや車の乗降

動作が緩慢なため、バスや車の乗り降りに時間がかかってしまう人がいます。

「さっさとしてください!」「なにぐずぐずしてるんですか!」等、焦らせるような声かけをすると、動揺して転倒の危険性が高まる場合があります。

乗降時にはこのような特性がある乗客がいることに配慮してください。

案内

何らかの障害で意思疎通が困難な人や外国の方の場合、日本語で説明しても伝わりにくい場合があります。コミュニケーションボードや写真、絵カード、電車・バスの路線図、駅の構内図（地図が読めない人もいるので注意が必要です）、話題と関連する実物（券売機を探している場合は切符の実物等）を見せることで理解しやすくなります。



知的障害等の障害のある人の中には左右の概念を理解することが難しい人もいます。

そのため、「右のほう」「左側」という表現では理解できないこともあります。

方向を伝える場合は、指をさして方向を示す等、**視覚的に理解**できるようにしてください。

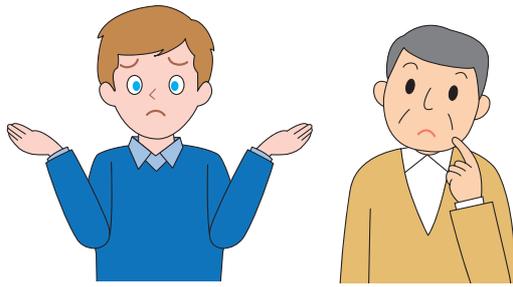
視覚障害のある人の場合、「あっちの方」「向こう側」といった表現や、「改札の横」等の目に見える目印を用いた表現では伝わりにくくなります。時計の針の方向（右方向を伝えるときは3時の方向等）で伝えると理解しやすくなります。

業務に支障がない場合は、できる限り一緒にその場まで誘導してください。

聴覚障害のある人は、言葉での説明では伝わりにくくなります。筆談等に対応しましょう（病気や事故等で後天的に聴覚に障害を抱えた人の中には**手話が理解できない人もいます**）。

また、災害発生時等の緊急アナウンスや振替輸送の案内をする際には、音声情報だけでなく、電光掲示板やホワイトボード等を活用して視覚的に理解できるような情報伝達方法も併用してください。その際、外国の方は難しい漢字や表現が理解しづらいことがあるので、「やさしい日本語」（→P52～P55参照）での表記を心がけてください。





外国人の中にも認知症や知的障害、聴覚障害のある人がいることも知っておいてください。
外国人だからといってその国の言葉で話しかければ伝わりとは限りません。

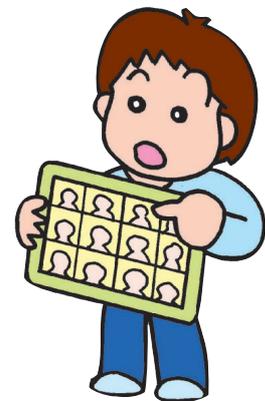
何に困っているかよくわからないとき

意思疎通が困難な人の場合、困っている様子なのは分かって話しかけても何に困っているのかわからないときがあります。どの電車やバスに乗っていいかわからない、トイレや改札の場所を探している、迷子、落とし物、体調不良等、さまざまな理由が考えられます。このような場合、コミュニケーションボードや写真、絵カード、実物を見せる、身振り手振り等で、まずは困っている事柄が何なのか、考えてください。

体や所持品にヘルプマーク、ヘルプカード等がついているようでしたら、支援方法や支援者の連絡先が書かれていることが多いので、「見ていいですか」と一声かけた上で、記入欄を確認してみましょう。



ヘルプマーク



考えてみましょう

加害の防止と能力の獲得

注意欠陥や衝動性の特性のある人は、被害に遭いやすいだけでなく本人が意図しない事故で加害者にもなりやすい側面もあります。特に、自転車に乗っているときは、不注意で人にぶつかる大事故につながることもあります。コミュニケーションが苦手な人は、謝罪をすることが苦手な場合もあり、一般の人であれば「ごめんなさい」ですむような軽微な衝突が思わぬトラブルを引き起こすこともあります。一方で、注意欠陥や衝動性の特性があるからと言って、トラブルを回避するために自転車の乗り方そのものを教えないというのも自立心を育む機会や能力獲得の機会を失ってしまうことにもつながります。

本人の能力や発達段階を踏まえて、適切な時期に適切な能力を獲得できるよう環境を整えることも重要ですが、同時に被害・加害の防止の視点も欠かせません。

自転車に限らず、被害・加害両方の危険性のある行動で、本人の移動の自由にもかかわるような行動については、全面的に禁止するのではなく、本人の能力や交通量等の周囲の環境を考慮して、条件付きの自由を与えるという方法があります。

例えば、家族や支援者と一緒のときは自転車に乗ってもよい、学校や施設等の敷地内では自転車に乗ってもよい、交通量の少ない場所を通るとき、施設の通所るときは決まった道であれば自転車を通ってもよい、天候が荒れそうなときは徒歩で移動する、等々のルールを考えてみましょう。



災害時の課題

台風や大雨による増水、大雪等のときに、いつもと違う光景を確認しにいかないと気がすまず、危ない場所に勝手に出かけてしまう人がいます。

報道でいつもと違う近所の映像をテレビで見ると興奮してしまうことがあります。

このような傾向のある人には、荒天時には刺激的な映像をなるべく見せず、

口頭で必要な情報を伝えたり、

文字が読める場合は文章による客観的な情報で必要な情報を伝えるようにします。



みなさんは障害者と聞いたとき どんな人を思い起こしますか？

車いすに乗った人でしょうか？
視覚障害のある人でしょうか？
さまざまな障害を抱える人々の中には、
見た目では障害があることがわかりづらい人もいます。



困っている様子の人を見かけたとき

例えば聴覚障害のある人は、一見障害があるようには見えません。
後ろから声をかけられたり、商業施設等で館内放送で緊急のアナウンスがあっても気付かないこともあります。

同じように、知的・発達障害や、自閉症スペクトラムとよばれる障害のある人も、
配慮が必要であることが気付いてもらいにくい傾向にあります。
家族とはぐれていたり、道に迷っていたり、
切符の買い方がわからずに立ちすくんでることもあります。

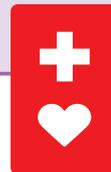


困っている様子の人を見かけたときは「何かお困りですか？」等の
声かけをしてもらえただけで、助けになることがあります。
中にはどうやって対応をしたらいいかわからないと思われる人もいることでしょう。
どう接していいかわからないときや声かけをしても意思疎通が難しいと感じたときは、
近くの駅員さんや施設のスタッフ、
交番のおまわりさん等に「困っている人がいること」を伝えてもらうだけでも大きな力になります。

考えてみましょう

ヘルプマーク

困っている様子の人を見かけたときは、持ち物や衣服を見てください。
持ち物や衣服にヘルプマークや支援の必要性を示したヘルプカードやワッペン等がついている場合があります。見えるところにヘルプマークがついてなくても、障害の特性や連絡先が書かれたヘルプカード等を持っている場合もあり、それを見せてくることもあります。
ヘルプマークは裏面やケースの中に支援方法や家族・支援者の連絡先が記載されています。
(防犯上の理由のため障害特性や支援方法しか書かれていない場合もあります)。
パスケース型のヘルプマークの場合、支援方法や連絡先はケースの中に書かれてあります。
緊急時はヘルプマークを開けて中を確認してください。



当事者の声

施設を利用する
障害のある当事者からの聞き取りで
次のような意見がありました。
参考にしてください。



大阪府内自立訓練施設
調査時期:2018年11月

調査対象者:8名 年齢21~44歳
療育手帳:(5名男性4名 女性1名)
精神手帳:(3名男性2名 女性1名)

支援者との関わりについて



施設キャラクター
「レモンけいさつくん」

良かったこと

料理をしてくれて助かる

洗濯をお願いするときもある

自分を信頼してくれて役割を与えてくれる

薬の管理や仕分けを手伝ってくれる

体調管理を手伝ってくれる

お金の管理を手伝ってくれる

ガイドヘルパーさんと
食事に出かけるのが楽しい

頼めばすぐに来てくれる

嫌だったこと

「スタッフ(支援者)はいいけどメンバー(利用者)は
ダメ」のような差別を感じる時がある

連絡がつかない時がある

わかりやすく話してほしい

勝手に決めつけられることがある
(それはあなたには難しいからこれにしておきなさい等)

難しい話をするので
わからないことがある

自分の判断でできることでも「ダメ」と
言われることがある

秘密があるような気がする
(〇〇さんは知らなくていいことだから等)

初対面なのに強引に
個人的な話を聞いて
くることがある



施設を利用する知的・発達障害のある小学生から中学生のこどもたちに聞き取りをしました。

写真等を見せながらの個別の聞き取り



自転車に乗っててこけた

道路を歩いていて怖いと思ったことがありますか？



歩道を歩いていて自転車にぶつかりそうになった
土日によく出かけるので
歩道で狭いところを歩くときは自転車に
気を付けなければいけない
自分がけがをさせたことはない



車がぶつかりそうになった

外を歩くときおうちの人に気を付けるよう言われていることはありますか



信号が青になるまで待つ
横断歩道を渡る



必ず行き先を伝えて遅くならないように帰る
いつも行き先は伝えている
門限は特はない



何も言われていない



一人では(外に)行かない
(歩くときは保護者等と)手をつなぐ



特はない
行き先は伝えている
学校終わった後はすぐ家に帰る

今日ここに来るときに 車や自転車に気を付けましたか、どんなことに気を付けましたか



家から駅まで車で送ってもらって駅から歩いてきた
車道は歩かない
狭い道では譲りあう 止まって先にいってもらう



左右確認



道路、歩道橋の階段
雨のときは滑りやすくなるから気を付けている



車で送迎してもらっている
学校に行くときもバス



あなたは自転車に乗ることができますか

できる
最近に乗っていない



小学校に入ったころから乗れるようになった



3歳か4歳くらいのころから
乗れる



保育園に入るところから乗れるようになった
コマなしで乗れるようになったのは小1のころ
大人になって困るからコマなしで乗る



できる
小学4年から5年のころに乗りはじめた
はじめのころこけて
軽いけがをしたことはある



自転車に乗るときどのようなことに気を付けていますか

たまにこけたりする



ぶつからないようにするにはブレーキをかける
狭い道で人とすれ違うときは止まって先にいってもら
車道を走る、端っこを通る
歩いている人がいなければ歩道を通っている



自転車をとめる場所を守る
大きなけがはしたことがない



小学6年のころまで乗っていたが
最近乗っていない



雨のときは自転車に乗らない
おうちの人に言われている

雨のときはどうしますか



傘はささない カップをきる
大雨のときは車で送ってもらうようにしている

乗らない



雨のときは乗っていない



雨のときは乗らないようにしている



自転車にぶつかってけがをしました そのあとどうしますか



ぶつかった人に助けてって言う
周りのほかの人に言う
おうちの人に言う、先生に言う

ヒエピタをはる
絆創膏をはる



言わない
めんどくさい



お母さんに言う



(119に) 電話する
面倒だから、
ぶつかっても言わないこともある

救急車を呼ぶ



知らない人には助けてって言えない



ゆっくり走る車にぶつかりました あまり痛くありませんでした そのあとどうしますか



言わない

おうちの人に言う
母親に言う





目に見えるけがや痛みがなかった場合
保護者や先生等、他者に報告するかどうか、報告しない場合その理由は？



先生に言う
友達が車とぶつかったとき助けに行ったことがある

先生には言う
ママには言わない



痛くなくてもおうちの人には心配するので
おうちの人には必ず言う



言わない
めんどくさい

言わない
わからない



道路を通るとき
どこに気を付けて通りますか



バイク・車に気を付ける
横断歩道では必ず止まる

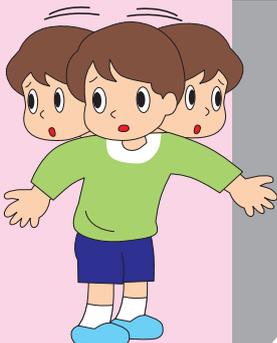
左右を確認



横断歩道を渡るときは
手をあげる



右みて左みて確認する
横断歩道を渡るときは
毎回確認している





暗くなったとき、どういうところに気を付けますか



車に気を付ける
暗くなったら外にはいかない
いつも放課後はデイサービスにいてるし帰るときは送迎車なので暗くなってから歩くことはない



右みて左みて渡る
夜7時には帰るようにしてる

バイク・車に気を付ける
自転車の電気を付ける



自転車で通るときは
スピードを出しすぎない



**右のページは、当事者用の「事故後の対応フローチャート」です。
ページをコピーして、二つ折りにして使ってください。**

上部分は、事故にあったとき、どのように対応すればいいか、本人が指で追って確認できるようになっています。

「れんらくの ほうほう」の枠に、家族や支援者に連絡する方法を書きます。

本人用なので、本人ができる方法を書いてください。

下部分は、助けを求めるとき、相手に見せて使います。

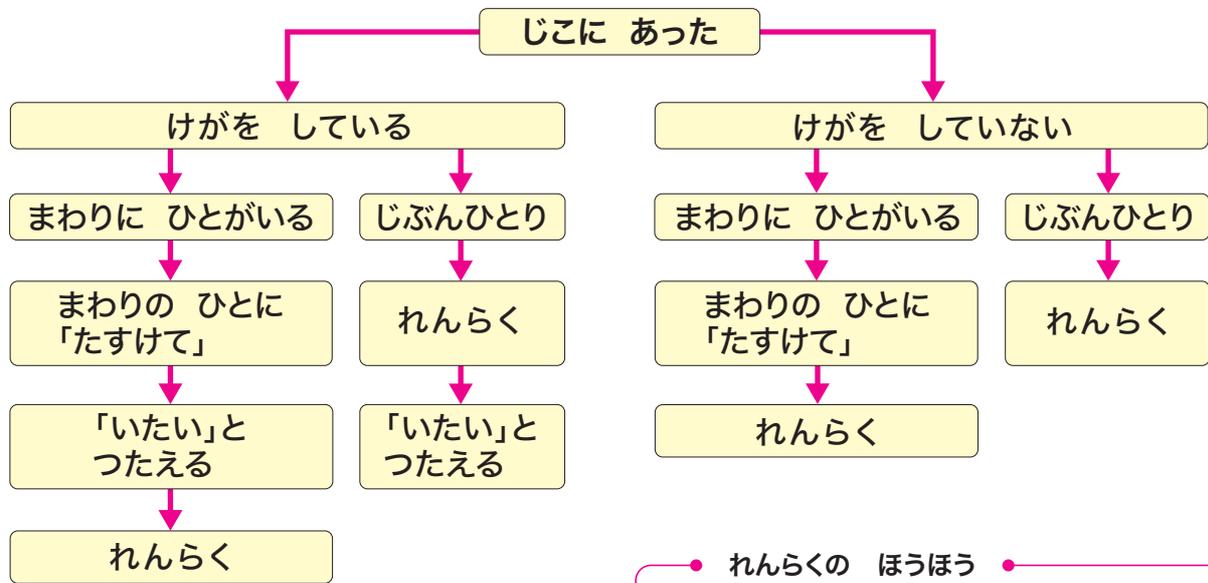
〈記入例〉

〈わたしは〉の枠には
特性や困りごとを書きます。
専門知識がない一般の人でもわかるように
書いてください。

● わたしは ●
(例)
はなしを するのが
にがてです

〈しえんのしかた〉の枠には
かかわり方や対応方法を、
助けてくれる人にわかるように
書いてください。

● しえんのしかた ●
(例)
ゆっくり はなしかけてください



きんきゅうれんらくさき

● れんらくの ほうほう ●

せつめいの じゅんばん

①いつ ②どこで ③なにがあった ④こまっていること

→

→

→

こまったときにはなしを しやすい するための え です
ゆびを さして きもちを つたえます

はい 	いいえ 		
		すこし	
			とても

ごめんなさい 	いたい 	こわい 	ありがとう
わからない 	たすけて 	きぶんがわるい 	じこにあった

かぞく・しえんしゃを
よんでください

きんきゅうれんらくさき

● わたしは ●

● しえんのしかた ●

のんでいる くすり (ある ない) _____

のんでいる くすりの なまえ _____

かかりつけの びょういん _____

アレルギー (ある ない) アレルギーの しゅるい _____

● そのほか しておいてほしいこと ●

地域の人・一般の人へ

障害のある子・人の家族から交通安全に関する困りごとや要望の聞き取りで次のような意見がありました。参考にしてください。



交通安全に関する困りごと

(保護者から見た障害のある子のヒヤリハット、困りごと)

家の近所や通学で

くるくる回転するものに興味を持ってしまう傾向があり、自転車に乗る練習をしているときに回転する車輪の間に指を入れようとする



送迎の際に黄色信号のときに車で通過するとルールを守ってないと騒ぎだす



信号しか見ていないので左折の車や自転車と接触しそうになる



道路横断の際、左右を見るように言っても頭を振ってるだけで車を見ていない



距離感がつかみづらいために傘やカバンを打ちつけてしまう



信号が変わった瞬間に走り出すため危ない



左右を見て車が来ていないことを確認しているが動作が緩慢なため、移動しようとするときには車が来ている



時差式信号や歩車分離式信号、押しボタン式信号等、変則的な信号が理解しづらい



よそ見をしていて側溝に落ちたことがある



大通りには見守りの人がたっていてくれるが、車の抜け道になっている危険な細い路地に見守りの目がないため不安になる



車が来ていることに気付かないで道を横断しようとする



歩道と車道の区別が付きづらい場所の通行
歩道と車道の境目があいまいな場所(色だけで境目を示してある道路)ではどこを通行すればいいか、どこで待っていればいいのかの理解がしづらいようである



歩道で待っているとき、歩道と車道の境目のぎりぎりのところに立ってしまう
境目から少し離れた歩道に目印(足のマーク等)がついていると本人も理解できると思う



車との接触が怖い



しゃべることが苦手なため道路でぶつかってしまったとき等に本人は頭を下げて「ごめんなさい」の意志を伝えようとしているが反省がないと思われてしまう



距離感をつかむのが難しいため、自転車でもどう見ても通れないような狭い場所(車止めがある場所等)に突っ込んでしまうことがある





電車で



電車の発車音にびっくりしてホームから落ちてしまった人がいる

エスカレーターに乗るタイミングがつかみづらい



自分に近い空間に他の人が近寄ってくると不安になってしまうため、混雑した電車に乗れない



電車で降りる駅を乗り過ごしたり間違えたりすることが多くいつも利用している駅でもたびたび降りるのに失敗している



男性ではあるが知的障害があるため女性専用車両に乗ってしまい他の乗客から厳しい叱責を受けて電車に乗れなくなった

災害時・荒天時

救急車や消防車が大好きで追いかけてしまう



サイレンの音や風の音を怖がってしまう



大雨や風等で音が鳴っていると音が鳴っている理由を知ろうとして窓を開けようとする



近所が増水して危険な状態なのに自分の目で確かめに行こうとする



自力通学できる子ではあるが2018年6月の大阪北部地震の際に電車のダイヤが大幅に乱れたときに、立ちすくんでいたヘルプマークを付けていたが、いつもは手助けしてくれる駅員さんからも声かけがなかったようで、駅に迎えに行ったときに孤立していた

交通安全教育への要望

事故に遭った後も相談できない人もいるので事故が起こった後の対応について、さまざまなパターンのシミュレーションを用いて教えてほしい



理由(なぜ危険か)をもう少し教えてほしい

一般的なルールを教えるだけでは自分がどうすればいいか想像しづらいのでイメージトレーニングができるような教え方をしてほしい

知的・発達障害のある子を指導する際には視覚的な支援を活用してほしい(写真や動画を使ったシミュレーションや近隣にある危険な場所を写真で撮影してSST(Social Skill Training)の要領でどうすべきか話し合う等)



障害者ってどんな人？

あなたは障害や障害者という言葉聞いてどんな人をイメージしますか
グループで意見を出し合い共有してみましょう



しょうがい

どんな人？

どんなことで困る？

困っている人を見かけたとき

何かで困ってそうな人を見かけました。話しかけてみましたが反応がありません。
どのような原因が考えられますか？

あなたならどのような支援をしますか？

反応がない理由は？

どんな支援をしますか？



使い方 グループワークする際参加者には、左のページをコピーして配り
ファシリテーターは右ページを参考に話を進めてください

障害者ってどんな人？

目的 多様な障害があり障害の特性によって困ることや支援の方法が異なることに気付く

ファシリテーター（グループワークを進行する人）は、議論を深める手がかりとして、適宜、次のような話題のヒントを提供してください。

イメージした人はどんな障害を抱えていますか？（障害の種類：視覚障害、聴覚障害）

その人の見た目はどうですか？（車いすに乗っている、杖を持っている、年齢等）

その人の生活での困りごとについて考えてみましょう

移動する際の困りごとはどんなことがあると思いますか

バスや電車を利用する際にどんなことで困りますか

（乗降、階段、券売機の利用等）あなたはどのような手助けができますか？



困っている人を見かけたとき

目的 障害特性の理解、障害は異なっても共通する支援方法があることを理解する

考えられる理由と支援方法

考えられる理由	支援方法
聴覚障害があり聞き取れない	筆談 等
認知症、知的障害等で話の内容が理解できない	やさしい日本語でゆっくり話しかける、具体的な物や写真をみせる、コミュニケーションボードを活用する等
日本語が理解しづらい （外国人、海外生活が長い人）	やさしい日本語でゆっくり話しかける、具体的な物や写真をみせる、コミュニケーションボードを活用する等



所持品や衣服にヘルプマークやヘルプカードがついていれば支援が必要な人とわかります。ヘルプマークやヘルプカードには障害特性や支援の方法、連絡先が書かれている場合があります。緊急時はヘルプマークやヘルプカードを確認しましょう。無言で体に触れたり所持品に触れたりするとびっくりして騒ぎ出すことがあるので体や所持品に触れるときは必ず「体にふれますね」「かばんの中を見てもいい？」のような声かけをするようにしてください。



研修用

意思疎通が困難な人への声かけ

声かけをしたのに大丈夫だといっています
本当に大丈夫なのでしょうか？



大丈夫？

怪我はない？

痛くない？



だいじょうぶ

けがはない

いたくない

この人は本当に困っていないのでしょうか？

どのような声かけをすればいいでしょうか？

大丈夫だといっている理由は？

どんな声かけをしますか？

自転車や車にぶつかった人を救護しようとしてしました。すると無言で立ち去ろうとしています。

どのような理由が考えられますか？

あなたならどんな声かけをしますか？

無言で立ち去ろうとしている理由は？

どんな声かけをしますか？



使い方

グループワークをする際参加者には、左のページをコピーして配り
ファシリテーターは右ページを参考に話を進めてください

意思疎通が困難な人への声かけ

目的

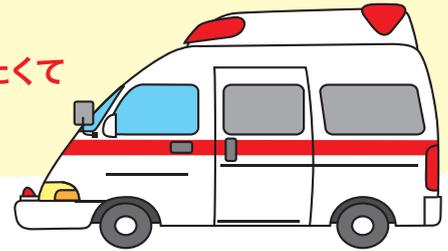
言われたことをそのまま反復してしまう傾向がある人の本当に伝えたいことを考えてもらう

言われたことをそのまま繰り返してしまう人がいます。

このような人に大丈夫?と声かけすると

そのまま大丈夫と答えてしまいます。

**人と話すことや説明することが苦手でその場から立ち去りたくて
その場しのぎの回答をしているのかもしれません。**



目的

事故後無言で立ち去る人の理由を考えてもらう

考えられる理由と支援方法

考えられる理由

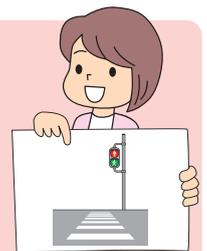
怖くなってその場から逃げようとしているのかもしれません。
怒られるのではないかとおびえているのかもしれません。
救急車が来た場合、音にびっくりして逃げ出す人もいます。



この場合、穏やかな口調でゆっくりと話しかけることで恐怖心を和らげることができます。

聴覚障害があり呼びかけの音が聞こえないのかもしれません。
この場合後ろからではなく正面から話しかけることで気付いてもらえます。

説明することが苦手なので、口頭での説明を求められると逃避行動に出る人もいます。
コミュニケーションボードや筆談を併用する、
こちらもゆっくりとした口調で身振り手振りを交えて話しかけることで
緊張がほぐれて話しやすくなることがあります。



決まった時刻通りに決まった行動をする人の中には自分がけがをしていますが
遅刻してはいけないと思って時刻通りに目的地に行こうとする人がいます。
ヘルプマークやヘルプカード等を身に付けている場合は、
声かけをしてマークやカードを確認しましょう。
連絡先が記載されていれば支援者や家族に連絡をします。
連絡先が分かるものを所持していない場合は、
最寄りの交番や警察に連絡しましょう。



一言で交通安全の教育と言っても、
年齢(発達段階)や障害の特性、
本人の興味関心や個性、
生活環境等によって、
必要なスキルやつまづく部分はそれぞれ違います。



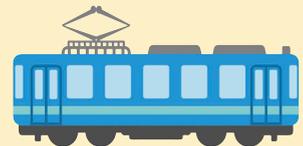
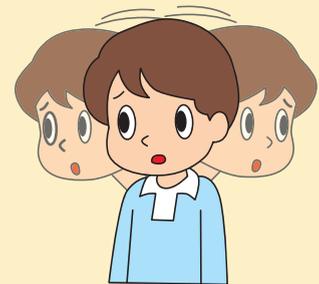
まず生活の場面でどんなことにこまっているか、
どんな理由でつまづいているかについて考えてみましょう。

例えば横断歩道を渡る際に危険な行動をとる場合でも、
そもそも交通ルールを知らない、理解していないのか、
交通ルールは知っているけども衝動的に飛び出してしまうのか
状況に応じた臨機応変な対応ができないのか、さまざまな原因があります。
交通ルールを知らないのであれば、まずは知識を伝える必要がありますし
頭を左右に動かしているものの左右に何があるか見ていない場合は、
確認する理由を教える必要があります。

左右確認していても動作が緩慢なため渡ろうとするときには車が来てしまう場合には
交通量の少ないより安全な道を利用するよう指導することも必要となります。

本人が**何に困っているのか**、

そして**なぜ困っているのか**をまず考えてみましょう。



基本的な交通ルールや安全な移動経路を教えるとき

本人が落ち着いているときに、おもちゃ(車・バス・電車のおもちゃ、人形等)を使って車とぶつかるとうなるのか、どのようにすれば安全でいられるかを具体的に、視覚的な方法で教えるようにしましょう。
写真、絵本、動画、エプロンシアター等、本人が興味を持ちやすいものを使って指導すると効果的です。

近所の安全な道や通学路、注意が必要な道を教えるとき

グーグルマップのストリートビューを利用して通学路、通所ルート等身近な光景を見せる、
注意が必要な場所を写真や動画で撮影して見せる等して、
視覚的に理解しやすい方法を併用して伝えると効果的です。
口頭の方がわかりやすい子もいれば、文字に書かれた方がわかりやすい子もいますので、
本人が理解しやすい情報伝達の方法で教えるようにしましょう。



条件付きの自転車の利用

自転車に乗れるようになって行動範囲が広がると自分の力で自分の行きたいところに行けるようになり自立心が育っていきませんが、トラブルに遭遇する危険性も高まります。

危険だからといってあらゆることを全面的に禁止してしまうと成長をとめてしまうことにもなりかねません。自転車の手放し運転や坂道をブレーキをかけずに降りるような兆候が見られるとき、トラブルに遭遇したときに逃げ出す、暴言を吐く等の傾向がみられるときは、条件付きの利用を検討してみましょう。

例えば、保護者と同伴のときは利用してもよい、交通量の少ない道やいつも利用している施設に行くときは利用してもよい、施設敷地内や広場等広い場所で車がこない場所であれば利用してもよい、等のきまりを周囲の交通環境や本人の特性をふまえて考えます。

その際、「あなたは能力がないのだからおとなの言うことを聞きなさい」というニュアンスで伝えると反発したり自信を喪失したりしてしまいます。

一緒に自転車の利用法を考えてルールを決める

(できるだけ本人の出した意見を採用する)ことで、本人も納得してきまりを守りやすくなります。

対策

回転する車輪に指や棒等を入れようとする子がいます。
車輪にホイールカバーを取り付けることで安全性が高まります。



こんな方法
もあります

危険な場所の写真を見せる
写真、動画、カード、おもちゃ等で教える
歩き方、公共交通機関の利用
グーグルマップを利用して通学路、
通所ルート等身近な光景を見せる



自転車のホイールカバー付き

危険な行動をとったとき

衝動性の特性が顕著にみられる子の場合、その場で注意しても指導が効果的でない場合があります。

何か興味があってそこに近づこうとしているとき

しようとしていることを邪魔されたと感じて

正しいことを言われても聞き入れられない状態なのかもしれません。

事前学習

その場で注意することも大切ですが、その前に落ち着いた環境で、話を受け入れやすい状態のときに写真や動画、絵本、おもちゃ等、具体的で視覚的なものを使って根気よく教えましょう。

(何をいれれば話を受け入れやすいかは、年齢や本人の興味、関心によって異なります)

実際の道路で危険な行動をとりそうになったときは、感情を交えずに適切な行動を教えるようにしましょう。

危険が迫っていない余裕のある状況では「横断歩道を渡るときは何に気をつける？」

「信号があるところではどうするんだっ？」等、事前に学習したことを思い出すよう声かけしましょう。

絵カードやタブレット等できまりを思い出させることも効果的です。

ルールを教えるとき

交通ルールを学ぶことは大切なことですが、残念ながら世の中のすべての人が交通ルールを几帳面に守っているわけではありません。

せっかくルールを教えても近所の人交通ルールを守っていないと、「なんでおとなはルールを守らなくていいの?」「子どもにだけ言うのはずるい」と感じて、自分もルールを破っていいと思ってしまう子どもも多くいます。

反対に言われたことを文字通り解釈する傾向のある子は、斜め横断等の交通ルールやマナーに違反をしている近所の人に腹を立ててそんなことしたらだめなんだよと言いに行ってトラブルになることもあります。

「ルールなんだから守りなさい」とおとながいても、ルールを守ることが大切な理由を説明しなければ、反発してしまうこともあります。

「ルールだから守りなさい」「守らないのは悪い子です」という言い方ではなく、**あなたの大切な体を守るためにルールは守りましょう**という伝え方をするようにしましょう。

**多くの子どもたちが口にする
「おとなもルールを守ってないじゃないか」という
反論に対して、
安全に移動することの大切さを教える方法の一つに、
自分たちのルールを作るという指導方法があります。**



身近な話題、たとえば近所の交通量の多い道の写真や動画を見せながら、安全に歩行する方法、自転車に乗る方法を一緒に考えます。関心を持ってもらうために、教える側が自転車に接触しそうになった等の自分の実体験を交えて話をするのもいいでしょう。

子どもたちから上がってきた意見を基に、我が家の安全のルールや〇年〇組の安全のルールを作ります。「横断するときは一回立ち止まって安全を確かめる」等のなるべく守りやすく、複雑でないものの方がいいでしょう。

自分たちで決めたルールであれば、おとなから命令されていやいや守るという反発心はうすくなります。「あのおとなは守っていない!」と言い出したときでも、「みんなが〇〇さんの考えたきまりを守ればもっと安全になれるよね」と返答することができます。交通マナーを守らない人がいても、我が家のルールやクラスのルールを知らないだけなので、「おとなだけずるい!」と思いにくくなります。ただし、一緒にルールを考えた保護者や先生方がそのルールを守らないと反発してしまいますので注意が必要です。



条件付きの自転車の利用

自転車に乗れるようになって行動範囲が広がると自分の力で自分の行きたいところに行けるようになり自立心が育っていきますが、トラブルに遭遇する危険性も高まります。

危険だからといってあらゆることを全面的に禁止してしまうと成長をとめてしまうことにもなりかねません。自転車の手放し運転や坂道をブレーキをかけずに降りるような兆候が見られるとき、トラブルに遭遇したときに逃げ出す、暴言を吐く等の傾向がみられるときは、条件付きの利用を検討してみましょう。

例えば、保護者と同伴のときは利用してもよい、交通量の少ない道やいつも利用している施設に行くときは利用してもよい、施設敷地内や広場等広い場所で車がこない場所であれば利用してもよい、等のきまりを周囲の交通環境や本人の特性をふまえて考えます。

その際、「あなたは能力がないのだからおとなの言うことを聞きなさい」というニュアンスで伝えると反発したり自信を喪失したりしてしまいます。

一緒に自転車の利用法を考えてルールを決める

(できるだけ本人の出した意見を採用する)ことで、本人も納得してきまりを守りやすくなります。

対策

回転する車輪に指や棒等を入れようとする子がいます。
車輪にホイールカバーを取り付けることで安全性が高まります。



こんな方法
もあります

危険な場所の写真を見せる
写真、動画、カード、おもちゃ等で教える
歩き方、公共交通機関の利用
グーグルマップを利用して通学路、
通所ルート等身近な光景を見せる



自転車のホイールカバー付き

危険な行動をとったとき

衝動性の特性が顕著にみられる子の場合、その場で注意しても指導が効果的でない場合があります。

何か興味があってそこに近づこうとしているとき

しようとしていることを邪魔されたと感じて

正しいことを言われても聞き入れられない状態なのかもしれません。

事前学習

その場で注意することも大切ですが、その前に落ち着いた環境で、話を受け入れやすい状態のときに写真や動画、絵本、おもちゃ等、具体的で視覚的なものを使って根気よく教えましょう。

(何をいれれば話を受け入れやすいかは、年齢や本人の興味、関心によって異なります)

実際の道路で危険な行動をとりそうになったときは、感情を交えずに適切な行動を教えるようにしましょう。

危険が迫っていない余裕のある状況では「横断歩道を渡るときは何に気をつける？」

「信号があるところではどうするんだった？」等、事前に学習したことを思い出すよう声かけしましょう。

絵カードやタブレット等できまりを思い出させることも効果的です。

障害に関する さまざまなマークの紹介



耳マーク

耳が聞こえない、聞こえにくい人であることを示すマークです。
また聴覚に障害のある人に配慮があることを示すマークでもあります。
このほかに聴覚障害のシンボルマークとして次のようなマークもあります。



聴覚障害者のための国際シンボルマーク

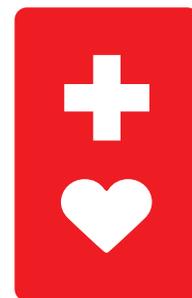


聴覚障害者のための国内シンボルマーク



白杖SOSシグナル普及啓発シンボルマーク

視覚に障害のある人が白杖を高くかかげているときは
助けを必要としているときです。このマークはそのSOS
のポーズを広く知ってもらうためのシンボルマークです。



ヘルプマーク

外見では障害があることがわかりづらい人、配慮を必要と
している人がつけているマークです。
多くの場合、裏面やバスキースの中に障害特性、必要な支援、
支援者、家族の連絡先が書かれています。
ヘルプカードと呼ばれるヘルプマークがついたカード型の
ものもあります。



身体障害者標識

肢体不自由である人が運転している
車に表示してあるマークです。



聴覚障害者標識

聴覚に障害のある人が運転している
車に表示してあるマークです。



高齢運転者標識

70歳以上の人が運転している
車に表示してあるマークです。

このマークのついた車に幅寄せや割り込みをすると、やむを得ない場合を除き道路交通法違反になります。



身体障害者補助犬マーク

身体障害者補助犬の啓発のマークで、補助犬を連れてくる人への理解を求めするために、施設やお店の入り口に貼ってあります。

身体障害者補助犬には視覚に障害のある人を補助する「盲導犬」、聴覚に障害のある人を補助する「聴導犬」、手足が不自由な人を補助（着衣の介助や指示したものを持ってくる等）する「介助犬」がいます。補助犬は周囲の人に迷惑をかけることがないように特別に訓練されている犬です。



障害者雇用支援マーク

障害者の就労支援を促進するため、公益財団法人ソーシャルサービス協会が審査を通して認めた障害者就労支援に取り組んでいる企業や団体、個人であることを示すマークです。



障害者のための国際シンボルマーク

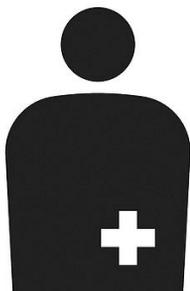
障害のある人が利用できる施設、スペースであることを示したマークです。

車いすのマークですが、身体障害者に限定したものではなく、その他の障害も含んだ障害者のためのマークです。



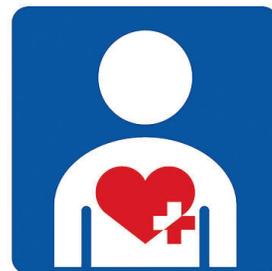
視覚障害者のための国際シンボルマーク

視覚に障害のある人のバリアフリーに配慮した建物や設備についているマークです。



オストメイトマーク

ストーマ(人工肛門や人工膀胱)を造設した人のための設備のあるトイレであることを示しています。



ハートプラスマーク

内部障害、内臓疾患のある人(心臓病や免疫機能障害等、見た目ではわかりづらい障害や疾患)への理解と協力、啓発に使われるマークです。

発達障害

発達障害にはADHD、LD(学習障害)、自閉症スペクトラム等があります。生まれつき、脳に何らかの機能の偏りがあるために起こるものと考えられており、親の育て方や本人の努力不足で発生するものではありません。一人の人に複数の障害があるケースも見られます。落ち着きがなく注意が散漫なため、転倒してけがをする、道路に急に飛び出してしまう等、思わぬ事故に遭遇することがあります。また、急な予定の変更や先の見通しの立たない状態に対応しづらく、環境の変化に敏感なため、いつもと違う状況になるとパニックに陥ることもあります。

周囲の無理解によって、努力をしない怠け者だと誤解されることや、わがままな人、おかしい人と思われて、孤立してしまうこともあります。発達障害のある子の中には、遊びに夢中になりすぎて暑くても無理をして熱中症になってしまう子、体調不良になっていてもうまく周囲に伝えることができない子もいるので、言葉だけではなく本人の様子を見て健康状態を判断する必要があります。

自閉症スペクトラム

「想像力が欠如し独特のこだわりがある」、「良好な人間関係を構築するのが苦手」、「コミュニケーションをとるのが苦手」等、自閉症や自閉症のような特性が見られる発達障害群を指します。特定の音やにおいに過敏に反応してしまう等、感覚面の偏りが見られることもあります。発達障害と一言で言っても、それぞれの障害に明瞭な境界線があるわけではなく、特性や知的能力に連続性(スペクトラム)がみられるため、自閉症や自閉症と類似の特性が現れる様々なケースを一つの群として捉えようというのが自閉症スペクトラムの考え方です。自閉症群全体を指して広汎性発達障害(Pervasive Developmental Disorders : PDD)という表現がされることもありますが、近年では、自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder : ASD)という表現が用いられることが多くなっています。事故や災害発生時には、非常ベルや防災アナウンスを聞いても危険だと認識できない、突発的な事態に対処できずパニックに陥る、コミュニケーションがうまく取れずに困っていても助けを求められない、災害時に避難所でなじめない、音やにおい等に過敏に反応してしまい(感覚過敏)身動きが取れなくなる、痛みに鈍感なため怪我をしていても周囲が気づきにくい等の困難が生じる可能性があります。また、空間認知能力が弱く、空間の中のどこに自分がいるのかを把握することが難しい傾向があります。このため、他人と適切な距離感をとることが難しく、自分の体の大きさをイメージすることが困難で、障害物との距離感をつかみづらいため、通行人や障害物にぶつかりやすくなります。時間の感覚についても把握することが難しい傾向にあります。一つの作業をするのにどれくらいの時間を要するのか想像することが難しく、過去、現在、未来の時間軸の流れの中で今いる自分の位置づけを把握することが苦手なため、予定表等による見通しが立ちやすくなる視覚的な支援がなければ混乱してしまうこともあります。

ADHD (Attention Deficit Hyperactivity Disorder)とは

発達障害の一種で、日本語では注意欠陥多動性障害や注意欠如多動性障害と言われます。注意力が散漫で一つのことに集中すること(注意欠陥)や、じっとおとなしくしていることが苦手で、落ち着きなく動き回る(多動性)のが特徴です。また、忘れ物をよくしたり、衝動的に危険な行動をしたり(衝動性)、時間や規則を守ることが苦手な傾向があります。このため、災害時には避難所での生活になじめないこともあります。

色覚異常

赤色と緑色等、特定の色の違いがわかりにくく困難を抱えます。以前は、色盲や色弱という表現が用いられていましたが、色の区別が全く付かないわけではないので、現在では色覚異常と表現することが多くなっています。色の見え方は



人それぞれ違いますし、加齢や視力の低下によっても見え方は変わってくるので、厳密に言うと色覚異常を障害と表現するのは適切でないかもしれません。見え方の違いによって生活上でなんらかの困難を生じやすい人と考えたほうが良いでしょう。事故や災害の観点から言うと、色の見間違いによる事故や、案内表示の色の違いが判別しにくくなるという困難があります。学校等の公共施設の案内表示には、色の判別が難しい人でもわかりやすいような配色やレイアウト、色の区別をつけなくてもわかるような表記方法(線の太さを変える、点線と実線を組み合わせる、○と▲のように形や塗り方で差をつける等)を工夫しておく必要があります。色の違いで表現する必要がある場合は、暖色同士(赤色とオレンジ等)、寒色同士(青と水色等)の組み合わせを避けて、明度に差をつけて暖色と寒色の組み合わせを用いる、背景と文字部分のコントラストをつけるといった工夫が必要です。

視覚障害

何らかの理由により、視力、視野等の視覚機能に問題があると、日常生活で著しい困難を抱えることになります。点字ブロックの上に自転車を放置する、通路に荷物を放置する等、些細な行動によってたちまち安全な場所が危険な場所になってしまう。視力に問題のない人にとっては簡単に避けられる物であっても、通路に必要な物が置かれることによって、視覚障害のある人の避難が著しく遅れてしまうこともあります。普段通りなれた道であっても、積雪によって歩道と車道の境がわからなくなることがあります。音を頼りにしているため、大雨や暴風になると音が聞き取りづらくなり、車や人の接近に気付きにくくなります。

その他の感覚喪失、感覚障害

病気等により、味覚や嗅覚、触覚を感知することが困難な人もいます。嗅覚に障害がある場合、ガス漏れや火災の初期兆候に気付かずに避難が遅れることがあります。

病気や事故で皮膚の感覚に異常が現れると、痛みや温度に対する反応が鈍くなったり、反対に鋭敏になったりすることがあります。そのため、痛みや熱さを察知して回避行動をとることが遅れ、けがや火傷が重症化してしまうこともあります。温度や気圧の変化に鋭敏な人は、空調のきいた涼しい場所から暑い場所に移動する際のわずかな気温や気圧の変化で体調が悪化することがあります。

足底の感覚が鈍くなるとバランスをとることが難しくなり歩行のふらつきが現れることもあります。手の感覚喪失や鈍麻、しびれがある人は、筆記用具を持つこと、箸やコップを持つこと、ドアの開閉等が困難になり、日常生活の様々な場面で支障をきたします。

内部障害

心臓機能や呼吸機能等、内部機能に何らかの障害を持つ人は、薬の服用や特別な治療が必要な場合があります。平常時は大きな問題がなくても、大規模災害時や大規模停電時に生命の危険に関わる困難を抱えやすくなります。心肺機能の障害により長距離を移動することが困難な人は、災害時に避難が遅れる場合もありますし、無事避難できても、常用している薬を持っていなければ、生命が危険に晒されることもあります。医療機器を使用している人は、停電時に生命や健康の危険を伴います。

一見すると障害があるようには見えないので、避難所で必要な支援が受けられないことや周囲の人から特別扱いされていると誤解されることがあります。人工膀胱や人工肛門等で専用の装具を利用している人は、プライバシーに配慮した装具の交換ができる場所が必要となります。心臓ペースメーカーを利用している方は、携帯電話や電磁波を発生する器具に対して不安に思うことがあるので、公共交通機関では配慮が必要となります。食事制限が必要なことも多いので、食事への配慮も必要となります。

肢体不自由

肢体不自由とは手足や体幹に不自由があることを指す用語です。このため、生活で日常の動作に支障があります。自力での移動や扉の開閉が困難なため、移動に著しい困難を伴います。車いすや杖、歩行器、手押し車等、歩行補助具を利用して移動している人の場合、段差がある場所や滑りやすい場所では移動が困難となります。階段やエスカレーター付近では、転落事故がたびたび発生しています。特に車いすの場合、踏切や柵のない用水路で操作を誤って大きな事故が発生することもあります。大雨や暴風、積雪により路面状況が悪化することで、事故の危険性が高まります。

半側空間無視

脳の損傷による麻痺や高次脳機能障害がある人の中には、視力に問題がなくても片側の空間を認識しづらくなる半側空間無視の症状が見られることがあります。特に、右脳に損傷がある場合、左側が認識しづらくなる左半側空間無視の症状を伴うケースが多くあります。左半側空間無視では、左側にあるものが認識しづらくなり、左から人に話しかけられても気付かず、話しかけた人を右側に探してしまうこと、左側の壁にぶつかること、左側の食事を残すことがあります。本人に自覚症状がない場合もあります。

てんかん

てんかんの症状として、脳の中の神経細胞が過剰に興奮することで痙攣や身体の硬直、脱力、意識消失等の発作があり、繰り返しこのような発作を起こします。脳のどの部分で過剰な興奮が起こるかによって症状が異なります。強い光刺激によって発作が誘発されることもあります。発作による突然の転倒によって、思わぬ場所でけがをしてしまうことがあります。駅のホームや階段等、転落・転倒によって大きな事故が起こりやすい場所、浴室等の溺水事故が起こりやすい場所では注意が必要です。頭部に保護帽子を着用する、硬いものやとがったものをなるべく遠ざける等、空間の安全性を高めておくことが大切です。気圧や気温の変化で体調が悪化することもあるため、荒天時や飛行機での移動の際には注意が必要です。

認知症

認知症の症状がある人は、何が起きているか理解できない、どこへ行っていいのかわからない、自分がいる場所がわからない等、様々な困難を抱えて戸惑ってしまうことがあります。認知症は高齢者にのみみられる症状とは限らず、若い人の中にも若年性の認知症を発症する人がいます。認知症には、共通して見られる中核症状と環境や本人の性格によって個人差のある周辺症状があります。

中核症状には、体験したこと自体を忘れる「記憶障害」（体験の一部を忘れる単なる物忘れとは異なります）、時間や場所等、今自分が置かれている状況がわからなくなる「見当識障害」、考える速度の低下や予想外の出来事への対処が難しくなる「理解力・判断力の低下」、計画を立てて段取りよく行動することが難しくなる「実行機能障害」があります。周辺症状には、徘徊、妄想、幻覚、うつ状態、不眠、異食（食べ物でないものを口にする）、攻撃的言動等があります。

線路を道路と混同して歩いてしまうことや、車で道路を逆走してしまうことがあります。道に迷ってしまい行方不明になった末に凍死してしまうという痛ましい事故も起こっています。



その他精神疾患や知的障害、薬の服用による判断力の低下

精神疾患や知的障害、薬の副作用により判断力が低下している人は、事故遭遇後の非常事態が認識できない、または、認識しづらい人の場合、本人の努力だけで対処することには限界があります。一見健康そうに見えても、意思疎通が困難な様子が見受けられるときは、周囲からの支援が必要となります。また、精神疾患に限らず、心に深刻な悩みを抱えている場合も、注意力や判断力が低下することがあります。

その他、何らかの理由で日本語が理解しづらい、文章が読みづらい人

身体・知的・発達・精神障害によるものではなくても、海外生活が長く日本語をほとんど理解できない人もいます。知的能力に問題がない人の場合、コミュニケーションボードや身振り手振りである程度の意思疎通を図ることができます。

障害者差別解消法、虐待防止法等関連法規

● 合理的配慮

発達障害に起因する特性のある子どもたち、とりわけADHD(注意欠陥多動性障害)の特性のある子は、興味を示すものが視界に入った時に周囲の状況を確認せず急に飛び出すことがあります。また、暗黙の了解を理解することが難しく、比喩や冗談を理解しづらく言葉を文字通りに理解してしまうこともあります。例えば、「廊下を走ってはいけません」と注意されると走るのはやめるのですが、走るかわりに何をすればいいかわからず身動きが取れなくなってしまう子もいます。抽象的な表現が理解しづらく、「ちょっとまってね」や「きちんとしなさい」と言われてもちょっとがどれだけの長さの時間なのか、きちんとするとはどういうことなのか理解できないこともあり、具体的な行動を提示して促さないと適切な行動ができないことがあります。

このような特性を有する子には特別な指導が求められます。

2016年4月に障害者差別解消法(障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律)が施行され、公立学校や公共施設では障害のある人々に対して、均衡を失した又は過度の負担を課さない範囲での合理的配慮の提供が法的義務として義務づけられるようになりました。交通事故のリスクの高いこれらの障害特性を有する子に対しても特別な指導や対策がなされる必要があります。

● 虐待防止法

子どもの安全確保のためには飛び出しの制止や待機の指示、場合によっては行動抑制が必要な状況もあります。一方で、近年では障害者虐待防止法や児童虐待防止法に基づく虐待防止も子どもの安全に関わる重要な事項として対策を行うことが求められます。この流れの中で、ベルトやひも等での身体拘束やスピーチロックと呼ばれる言葉による行動抑制(そこでずっと待ってなさい等)も虐待の一種と考えられるようになっていきます。

例外的に緊急手段としてやむを得ない身体拘束や行動抑制が認められることもありますが、その条件として①一時性(常態化していない)、②切迫性(危険な事態が迫っている)、③非代替性(他に手段がない)のすべての要件を満たしている必要があります。

安全確保と身体拘束の禁止は、実際の交通安全指導の現場では線引きが難しい点もありますが、近年の虐待防止に関する動向も意識して指導することが求められます。



「やさしい日本語」とは

外国人や障害のある人でも理解しやすいように、普段使われている日本語をよりわかりやすいように表現した日本語です。より分かりやすくするために、分かち書きをする、漢字にルビをふる、文の構造を短くする、という工夫をします。弘前大学人文学部社会言語学研究室(佐藤和之先生の研究グループ)を中心に研究が進められてきました。現在では、災害時等の緊急の呼びかけや、行政からのお知らせ、公的機関の窓口対応等、さまざまな場面で用いられています。

その人の育ってきた文化的背景や生活様式によって、どのような表現がわかりやすいかは異なるので、どの表現が正しい、間違っているということは一概には言えません。特定の人や集団に伝えたい場合は、その人に合った表現をコミュニケーションを通して工夫していくといいでしょう。一般的に言うと、より平易な表現で短く言い表すと伝わりやすくなります。

弘前大学の社会言語学研究室で示されている、やさしい日本語にするための方法を抜粋して紹介します。

参照：弘前大学「やさしい日本語」サイトマップ
「やさしい日本語」有志の会

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/sitemap.htm>
<http://nihon5bousai.web.fc2.com/>

1

難しい言葉を避け簡単な語彙を使う 類似表現はできるだけ統一する

危険 → **あぶない** 召し上がる → **たべる**

相談してください、お尋ねください
ご連絡ください → **聞いてください**

2

一つの文を短くして分かち書き(文の切れ目に空白を入れること)をする 主語や修飾語を短くする、文の構造を単純にする

車両が多数往来する交通量の多い道路を歩行する際は危険を伴うため安全に十分留意して歩行すること。

→ **くるま** **車**が **おお** **多い**道は **あぶない**です。
くるま **車**に **き** **気**をつけて **ある**いてください。



3

緊急時によく使われる言葉や日常生活に不可欠な言葉はそのまま使って〈 〉を使って分かりやすい表現で説明する

ひ なん じょ → 避難所 〈にげるところ〉
 ひ なん じょ
 じゅ きゅう しょう → 受給証 〈支給を受ける人が持つ紙〉
 じゅ きゅう しょう し きゅう う ひと も かみ
 たち いり きん し → 立入禁止 〈中に 入らないでください〉
 たち いり きん し なか はい

4

外来語、和製英語を用いるときは気を付ける
(○は比較的伝わりやすいもの、×は外国人に伝わりにくいもの)

○ → ガス、テレビ、バス
 × → ライフライン、パソコン、アルバイト

5

ローマ字は伝わりにくいので避ける

6

擬音語、擬態語は外国人に伝わりにくいので避ける
(知的障害のある人や幼児には伝わりやすい表現となります)

→ ガサガサ、グラグラ、キラキラ 等

7

漢字やカタカナにはルビ(ふりがな)を振る
(全部ひらがなにしてしまうとかえって読みにくくなる場合があります)

同音異義語がある言葉は漢字で表現してルビを振ります。

8

日時の表現は分かりやすくする

西暦で表記するか、和暦を用いなければいけない文書では西暦と併記する。
外国人や知的障害のある人の中には24時間表記が理解しづらい人がいます。
12時間表記をするか24時間表記と併記するようにしましょう。

〇〇時から と書きたいときは ～ を用いずに「〇〇時から」と書く

○ → 2018年 4月6日 午後4時から
 ねん がつ にち ご ご じ
 × → 平成30年 4 / 6 16:00～

9

動詞を名詞化した表現は分かりにくいのでできるだけ動詞で表現する

地震の揺れがあった → **地震で 揺れた**

事故により電車で遅れが生じた → **事故で 電車が 遅れた**

10

あいまいな表現や、「おそらく」「たぶん」等の表現を避ける
断定を避けたいときは「かもしれません」で言い換える

台風の恐れがあります → **台風が 来るかもしれません**

おそらく台風は日本に上陸するものと思われ

→ **台風が 来るかもしれません**

11

二重否定、部分否定は避ける

急がないと間に合わない → **急ぎましょう**

18歳未満の方はご利用をご遠慮ください

→ **18歳以上は 使えます**

この食べ物は食べられなくはないかもしれない

→ **食べるのは やめましょう**

12

文末表現はできるだけ統一する

可能の表現 れる・られる

→ **することができます**

推量の表現 ～でしょう

→ **かもしれません**

指示の表現 ～していただけるようお願い申し上げます → **～してください**

〇〇市でも△△の被害に遭わないよう地域住民に注意を喚起しているところです

→ **△△に 注意してください**

→ **△△に 気をつけてください**



その他、わかりやすくするための工夫

文書で伝えるとき

必要な情報を強調させて目立たせる（枠で囲む、色を変える、大きさを変える）
冒頭部分に重要な情報を明示する（表題で何についての文書なのか明確にする）
不必要な情報は削除する（時候の挨拶や重要でない補足情報）
イラストや地図、図表等、言葉がなくても理解できる視覚情報を活用する

口頭で伝えるとき

言葉だけでなく
身振り手振り、写真や実物等の具体的な物の提示、
コミュニケーションボードや絵カード等を活用することで、
より伝わりやすくなります。



* 調査・制作協力 *

大阪自閉スペクトラム症協会
自閉症スペクトラム児・者を支援する親の会オアシス
宝塚発達コミュニティ『花』
株式会社フラットフィールド 宙★りす
NPO法人市民活動サークルえん
放課後等デイサービスtuna
放課後等デイサービス ハピスポ
NPO法人ぴーす
NPO法人南大阪自立支援センター
放課後等デイサービスちえりいくらぶ
つぼみの会(天王寺区発達障がいを持つ子の親の会)
相談支援たにまち
せんしゅう授産センター
埼玉県川口市立元郷小学校